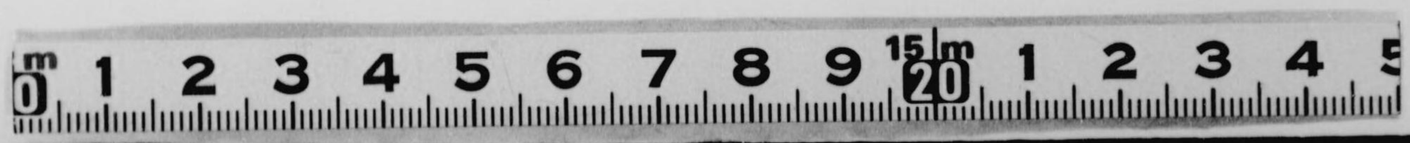
投



377
71

377-71

帝國圖書館藏

泉鏡花作

本橋

東京
春陽堂發行

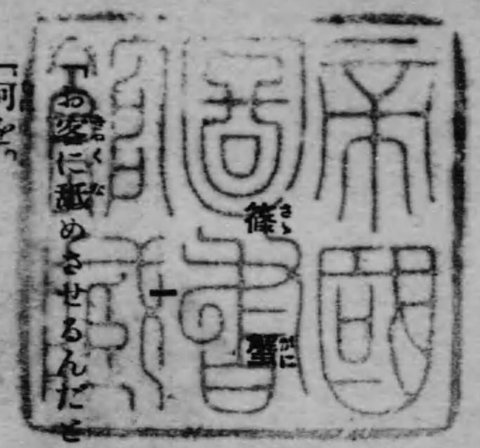
大正
7. 6. 10
内交

目次

篠蟹……一
檜木笠……一〇
銀貨入……一九
手に手……三一
露地の細路……四六
柳に銀の舞扇……五四
河童御殿……七六
柴蝶と蛤……九一
おなじく妻……一〇一
横槊賦詩……一一〇
鼎の筒袖……一二〇
縁日がへり……一四二
サの字千鳥……一四七
梅ヶ枝の手水鉢……一五六
口紅……一六五
一重櫻……一七三

代木丁々……一八一
空蟬……一九〇
彩ある雲……二〇三
鷺鷥……二〇九
生理學教室……二一九
美學……二三六
怨靈比羅……二四四
一口か一挺か……二五四
神冠……二六三

川岸の浦島……二七二
頭を釘……二七六
露霜……二八六
彗星……二九二
綺麗な花……二九六
振向く處を……三〇一
あはせぶがみ……三〇六
振袖……三一〇



篠雪

「何を。」

「お客に飲めさせるんだぜよ。」

「其の[illegible]よ。」

腕白もの〳〵十ウ九ッ、十二二なのを頭に七八人。春の日永に生欠伸で鼻の下を伸

ばして居る、四辻の飴屋の前に、押競饅頭で集つた。手に手に紅だの、萌黄だの、紫だの、彩つた螺貝の獨樂。日本橋に手の屆く、通一つの裏町ながら、撒水の跡も夢のやうに白く乾いて、薄い陽炎の立つ長閑さに、彩色した貝は一枚一枚、甘い蜂、香しき蝶に成つて舞ひさうなのに、ブン〳〵と唸るは虻よ、口々に喧しい。

此の聲に、清らな耳元、果敢なげな胸のあたりを飛廻はられて、日向に惱む花がある。

盛の牡丹の妙齡ながら、島田髷の縺れに影が映す……肩揚を除つたばかりらしい姿も大柄に見えるほど、荒い絣の、聊か身幅も廣いのに、黒繻子の襟の掛つた縞御召の一枚着。友染の前垂、同一で青い帶。緋鹿子の背負上した、それしやと見えるが仇氣ない娘風俗。つい近所か、日傘も驕さず、可愛い素足に臺所穿を引掛けたのが、紅と淺黄で羽を彩る飴の鳥と、打切飴の紙袋を雨の手に、お馴染の親仁の店。

有りはしないが暖簾を、潜りさうにして出た處を、捌いた褄も淀むまで、むら〳〵と其の腕白等に寄つて集かられたものである。

「煮てかい、燒いてかい。」

「何、口からよ。」

と、老成た事を云つて、中でも矮少が、鼻まで屆きさうな舌を上瓿にべろんと行る、此奴が一藝。

「まあ、可笑しい。」

若い妓は、優しく伏目に莞爾して、

「お客樣が飴なんか。大概御酒をあがるんですもの。」

で、一寸紙袋を袖で抱く。

「其だつてよ、其でもよ、髯へ押着けやがるぢやねえか。」

「不見手様。」と又矮少が、舌をぺろんと鼈す。
若い妓は柔しかつた。むつともしさうな頬は尙ほ細つて見えて、
「あら、大な聲をするもんぢやないことよ。」
「だつて、看板に掛けてやがつで。」と一人が前を遮るやうに、獨樂の手繰をづるり
と伸す。
「違つたか。雪や氷、冷い氷よ。そら水の上に、なんだ。」
「不見手様。」と矮少が顧でしやくる。
「祗少やい、舌を出せ。」
「出せよ、蓄生。」
「うゝむ、うゝむ、然う號令を掛けちや出せやしませんさ。」
と焦つて頭突きに首を振る。

「馬鹿、咽喉ぼとけを摑んで居やがる。」
「ほゝゝ。」と、罪の無い皓齒の蒼。
「畜生、笑つたな、不見手。」
と矮小は、ぐいと腕を捲つた。
「可厭、又……大な聲をして。」
「大な聲が何うしたんでえ。」
と、一人の兄哥さん、六代目の假聲さ。

二

其の若い妓は、可愛い人形を抱くやうに、胸へ折つた片袖で、面を蔽ふ姿して、
「堪忍して下さいな。」

と遣瀬なさゝうに悄れて云ふ。

「やあ、謝罪るぜ、ぐうたらやい。」

「不見手よりか心太だい。」

又しても此の高聲、はつとしたらしく袖を驚して、若い妓は隱れたさうに、

「内證なのよ、ねえ、後生よ。姉さんに聞えると腹を立ちますわ。」

「何を云つてやんでえ。」

「分るもんか。」

矮小が拔からず、べろん、と出して、

「お前ン許の姉いんは、町内の狂人ちやねえかよ。」

「其奴も怪しいんだぜ、お夥間だい。」

と背後から喚くと、間近に、(何。)とか云ふ鮨屋の路次口。鮴のやうにちよろり

と出た同一腕白。下心あつて、用意の爲に引込むで居たらしい。芥溜を探したか、皿から浚つたか、笹ッ葉一束。棒切れの尖へ獨樂なはで引括つた間に合せの小道具を、さあ來い、と云ふ身で構へて、驅寄ると、若い妓の島田の上へ突着けた、ばさ〳〵ばッさり。

が、默つて、何にも言はないで、若い妓は俯向いて歩行き出す。

頸摺れに、突着け、突掛け、

「やあ、おいらんの道中々々〳〵！」

「大高、旨いぞ。」と一人が囃す。

「おつと任せの、千崎彌五郎。」

矮小が、心得、拔衣紋の突袖で、据腰の露拂。早速に一人が喜助と云ふ身で、若い妓の袖に附着く、前後にづらりと六人、列を造つて棟りはじめたので、あはれ、

若い妓の素足の指は、爪紅が震へて留まる。

此奴不見手、と笹の葉の旗を立てゝ、日本橋あたり引廻しの、陽炎搖るゝ影法師。

日南に蒸れる酢の臭に、葉も花片も萎えむとす。

引切の無い人通りも、凡そ途中で立停まつて、藝者の形を見物するのは、鰻屋の前に脂氣を嗅ぐ、奥州のお婆さんと同じ恥辱だ、と云ふ心得から、誰も知らぬ顔で行違ふ。……最も對手は小兒である。

世渡や爰に一人、飴屋の親仁は變な顔。叱言を、と思ふ頬邊を窪めて、もぐ〳〵と呑込んで、默言の眉毛をもじや。若い妓は氣の毒なり、小兒たちは常得意。内心痛し、頗る痒しで、皺だらけの手の甲を願の下で摺つてござつた。

「川柳にも有るがね、(默然と辻斬を見る石地藏。)さね。……俺も弱つたよ。……近い處か、西川岸にござらつしやる、ね、あの、目の前であつたらうづりや、お地藏

樣は何うお扱ひなされうかと、つく〳〵思つて居ましたよ、はい。……」

と後で人に然う云つた。又此の飴屋が、喇叭も吹かず、太鼓をトンとも鳴らさぬかはりに、何時でも廣告の比羅がはり、赤い涎掛をして居る名代の葬で、猶ほ可笑い。

「笹や、笹々笹や笹、笹を買はんせ煤竹を――」

大高うまい、と今呼ばれた、件の(鼬みめよし)が、笹を故と、島田の上で、ばさ〳〵と振りながら、足踏をして唱出した。

聲を揃へて、手拍子で、

「笹を買はんせ煤竹を――」

此處で三音諧張上げる。氣障な調子で、

「大高源吾は橋の上え、。」

三

「あら、お止しなさいよ、そんな唄。大嫌だわ。二階に寐て居る姉さんが、病氣で癇が立つておいでだから、直ぐに聞きつけて、澤山加減を惡くするからね……眞個に嫌なのよ。」

と若い妓は頭を振るやうに左右を顧る。

「何が嫌ひだい。」

「生意氣云ふない。」

「狀あ！　女郎奴、手前に嫌はれて幸だ。好かれて堪るかい。」と笹を持つたのが、ぐいと其の棹を小脇に引くと、呀、斜に構へて前に廻つた。

「嘘よ、お前さんぢやないのよ。其の大高源吾とか云ふ、づんぐりむつくりした人がね、笹を擔いで浪花節で歩行いては、大事な土地が汚れるつて。……橋は臺なし、堪らないつて姉さんが云ふんだわ。」

「知つてらい！」

と矮小が、べろ〳〵と舌を吐いて、

「不斷、然う云やがるとよ、可か。手前ン許の狂女がな、不斷然う云やがる事を知つてるから、手前だつて尋常は通さないんだぜ。僕がな、形を窶してよ、八百屋の小兒に生れてい、間者に成つて知つてるんだ。行軍將棊でもな、間者は豪いぜ、伴内阿魔。」

商人は原より、親が會社員にしろ、巡査にしろ、田舍の小伜で無いものが、娘を苛める仔細はない。故あるかな、スパルタ擬きの小年等が、武士道に對する義憤な

のである。

「忠臣、義士の罰が當らあ。」

「勿論よ。」

ひよろ竹と云はれる痩せたのが、きい〳〵と軋む聲で、

「疾に罰が當つて、氣の違つた奴なんか構はねえや。……此奴に笹葉を頂かせろ。」

「嘘をさしたれ。」

と、含羞んだ若い妓の、揃つた目鼻の眞中を狙つて——お蝶の蟲が、もじや〳〵もじや。

「へッくしよ。」と思はず唐突に陽炎を吸つて咽せた……飴屋の地藏は堪らなさうに鼻を撫でる。

當の狙はれた若い妓は、はッと顏を背けたので、笹葉は片頰外れに肩へ辷つて、

手を拂つて、持つたのを引拂はれて、飴の鳥はくしやんと潰れる。

「可愛相に、鶯を。」

とつひ、衣紋が摺つて、白い襟。髮艶やかに中腰に成つた處を、發奮で一打、ト颯と烏の翼の影、笹を擧げて引被る。

「あゝ、少時。」

慌しく聲を掛けて、白足袋のしよぼけた草鞋で、つか〳〵と寄らうとした、が、ふと足を曳いて、手甲掛けた手を差伸ばして、

「もし〳〵、大高氏、暫時、大高氏。」と大風に聲を掛けて呼んだのは、小笠を目深に、墨の法衣。脚袴穿で、むかし傀儡師と云つて、被蓋の箱を頸に掛けて、胸へ着けた、扮裝は仔細らしいが、山の手の臺所でも、よく見掛ける、所化か、勸行か、まやかしか、風體怪しげなる鉢坊主。

形だけも世棄人、それでこそ、見得も外聞も洒落も構はず、爾徹も無く、途中で藝者を見て居らるゝ。——斜めに向ふ側の土藏の白壁に、へまむし、と炭團の缺で樂書をした如く彳むで、熟と先刻から見詰めて居た。

小笠のふちに、手を掛けながら、

「源吾どの、一寸、此へ。……」

四

「そりや、(かな手本。)の御連中、彼處で呼んで居さつしやる。」

潮を踏んだ飴屋は老功。赤い涎掛を荷の正面へ出して、小兒の捌口へ水を向ける。

「僕の事かい。」

と猶豫ひながら、笹ッ葉の竹棹を、素直に突いた下に、蠻のほつれに手を當てゝ、

をくれを搔いた若い妓の姿は、願の糸を掛けた狀に、七夕らしく美しい。

「お前樣方で無うて、忠臣藏が何處に有るかな。」と飴屋は頷くやうに顚杖を支いて言ふ。

「一所においでよ。皆。」

「おい。」

義士の人數、六人の同勢は、羽根のやうに、ぽん〳〵と發奮んで出て行く。

坊主は、笠ながら會釋して、

「貴殿は大高源吾どの？」

笠を持つたのが、(氣を着け。)の姿勢に成つた。

「え丶、然うです。」

「此方はな。」

見何かれた、ひよろ竹は、何故か、ごしゞゝと天窓を掻いた。
「僕は赤鞘の安兵衛てんです。」
「はゝあ、堀部氏でおいでなさる。」
「千崎彌五郎だよ。」
矮小は脣を、もゞゝと遣る。
「成程——其の他いづれもお揃ひでありますな。」
と六人をづらりと見渡し、
「いや、此は誰方も、はじめまして御意を得ます。」
こゝで更めて又慇懃に挨拶した。小兒等はきよとんとする。
中に大高源吾が、笠を覗込んで、前へ屈み、
「坊さんは誰なんです。」

「恰悧だな。何、天晴御會釋。如何さま、御姓名を承りますに、此方から先へ氏素姓を申上げぬと云ふ作法はありませなんだ。しかし御覽の通り、木の端同然のものでありますので、別に名告りますほどの苗字とてもありませぬ。愚僧は泉岳寺の味噌摺坊主でござる。」
事實元錄の義士扱ひ。で、言葉も時代に、丁重に、生眞面目な應對。小兒等は氣を取られて、此の味噌摺坊主に、笑ふことも忘れて浮りで居る。
「えゝ、さて各自には、既に御本望をお遂げなされたのでありまするか。それとも、又今夜にも吉良邸へお討入りに相成りますかな。」
小兒等は同じやうに顔を合はせて、猿眼に、猫の目、上り目、下り目、團栗目、いろ〳〵なのが、ぱちくるのみ。
自から名告つた味噌摺坊主は、手甲の手の腕組みして、

「はゝあ、御思考最中と見えますな。いや、何にいたせ、貴方がたを義士の御連中とお見掛け申して、些と折入つて、お話し申したい事があります。餘り端近。な、此處は餘り端近で、それ〳〵通りがゝりの人目も多い。も些と此へ。一寸向ふへ。あの四角の處まで、手前と御同道が願ひたい。

決して惡いことではありませぬ。さあ〳〵誰方も。」

と云ふより早く、すた〳〵と通りの方へ。

松屋あたりの、人通。何方が(端近。)なのか其さへ分らず、小兒等は魅せられたやうに成つて、ぞろ〳〵と後に續く。

電車が來る、と物をも言はず、味噌摺坊主は飛乘に靡然、と乘つた。で、其の小笠をかなぐつて脱いだ時は、早や乘合の中に紛れたのである。——白い火が飛ぶ上野行。——文明の利器も恁う使ふと、魔術よりも重寶である。

角店の硝子窓の前に、六個の影が、ぼやりとして、中には總毛立つて、震へたのがあつた。

銀貨入

五

地に碎けた飴の鳥の鶯には、何處かの手飼の、緋の首玉した小猫が、ちろ〳〵と鐸を鳴らして搦んで轉戯れる……

若い妓の、仔細なく其處を離れたのは云ふまでも無い。

と自から肩の嬌態、引合はせた袖をふら〳〵と、臺所穿をはづませながら、傍見らしく顏を横にして、小走りに驅出したが、歸りがけの四辻を、川岸の方へ突切らうとする角に、自働電話と、一棟火の番小屋とが並んで居る。……

ものも、恁う、新舊相競ふと、至つて對照が妙で、何うやら辻番附の東西の大關と
でも言ひさうに見える。電話の方が（塗立注意。）などゝ來ると愈々日當りに新味を
發揮するが、油障子に（火の番。）と書いたお定りの屋臺は、晝行燈と云ふ形。屋形船
が化けて出て河童が住居ふ風情がある。註に及ばず、晝間は人氣勢もあるので無い。
其の兩方の間の、もの蔭に小隱れて、意氣人品な黒縮緬、三ツ紋の羽織を撫肩に、
絹大島の二枚小袖。襲ねて着てもすらりとした、瘦せぎすで背の高い。油氣の無い
洗髪。簪の突込み加減も、じれッたいを知つた風。一目にそれしやとは見えなが
ら、衣紋つき端正とじて、薄い胸に品のある、二十七八の婀娜なのが、玉のやうな
頸を伸ばして、瞳を優しく横顔で、熟と飴屋の方を凝視めたのがある。
「あら、清葉姉さん。」
と可懷しさうに呼掛けて、若い妓はパッタリ留まつた。

「お千世さん。」
と柳の眉の、面正しく、見迎へて一寸立直る。片手も細り、色傘を重さうに支い
て、片手に白瀬鹽に翁格子、薄紫の裏の着いた、銀貨入を持つて居た。
若い妓はお千世と言ふ、それは稲葉家の抱妓である。
「お出掛け、姉さん。どちらへか。」
「否、歸途なの。一寸淺草へお參りをしたんです。――今ね、通りがゝりに見たん
だけれど、お前さん、飛んだ目にお逢ひだつたわね。」
「えゝ。」
「でも、可かつたこと。私ね、見て居て何うしやうか知ら、と思つたのよ。――お
千世さん。」
「は、」

と顔を上げて、甘へたさうに、ひつたり寄る。
「そして……那の坊さんは知つた方。何なの、内へ勸化にでも來たことのある人なの？」
「否、些とも知りませんわ。」
「然う。」
「笠を被つておいでなすつて、顔は些しも見えなかつたんですもの……でも、然うで無くツても、まるッ切、心當りはありませんよ。」
「然うね、それは然うだともね。」
清葉は何故か落着いて頷いた。
若い妓は、氣が入つて口早に、せい〳〵と呼吸をしながら、
「でもね、私、いちめッ兒を、皆引張つて電車通りの方へ行つて下すつた後姿を見

て拜んだんですよ。私お地藏樣かと思ひました。……えゝ。」

六

お千世は、ぱつちりとした目を瞬いて、
「飴屋の小父さんは、鶯が壞れたから、代りを拵へて、而して持つて行けッて云つたんですよ。……私、それ處ぢや無いんですもの。歸つて姉さんに然う云つて、あの西河岸のお地藏樣へお參りに行くか、でなけりや、直ぐ、あの、お佛壇へお燈明をあげて拜みませうと思つて驅出して來た處なんですわ。」
「まあ、お千世さん。お前さん、大な態度をして偖なのかね。私は蜜豆屋かと思つたよ。」
と細りした頰に靨を見せる、笑顔の其さへ、おつとりして品が可い。此の姉さ

んは、渾名を令夫人と云ふ…　十六七、二十の頃までは、同じ心で、令嬢と云つた。敢て極つた旦那が一人、おとつさんが附いて居る、其の意味を諷するのでは無い。其間のせうそくは別として、爾き風采を稱へたのである。

序にもう一つ通名があつて、それは横笛である。曰く、清葉、曰く令夫人で可いものを、誰が詮索に及んだか、其の住居なる檜物町に、磨込んだ格子戸に、門札打つた本姓が（瀧口。）はお誂で。むかし讀本の所謂（名詮自稱。）に似た。此の人、日本橋に褄を取つて、表看板の諸藝一通恥かしからず心得た中にも、下方に妙を得て、就中、笛は名譽の名取であるから。

「あら……清葉姉さん酷いこと、何ぼ私かつて蜜豆を。立つて、住來で。」

「ほゝゝ、申過ごしました、御免なさいよ。否ね、實はね、……小兒衆が、通せん坊をしてわや〳〵囃して居るから、氣に成つてね、密と樣子を見て案じて居たの。

……あの、最つと此方へお寄んなさいよ。」

と、令夫人は仲通りの前後を、芝居氣の無い娘じみた眴し方。で、件の番小屋の羽目を、奥の方へ誘ひ入れつゝ、

「別にね、お前さんと話をして居るのを見られて惡い事は無いんだけれど、人が通つて極りが惡いから。」

で、忍んだ梅ケ香、ほんのりとする俤。……勤めする身の、夏は日向、冬は日蔭へ路を讓つて、眞中を歩行かぬことゝ、不斷心得た女である。

「最う、あれだわ。誰か竹棹でお前さんの髻を打たうとした時は、何うしやうかと思つてねえ。くづしたお寶が些と有るから、驅出して、あの中へ撒かうか知ら、と既の事……」

爲に銀貨入を手にしたので。

「口で留めたつて、宥めたつて、云ふことを利くんぢやなし、喧嘩をするにも先方は小兒だし、と云ふ中にも、私は意氣地が無くつて、そんな氣には成れないし、お寶を撒くに限る。あんな兒に限つて、そりや屹と夢中に成つて、お前さんの事なんざ落ことして、お寶を拾ふから、と其のお前さん、謀、計略？」

と打微笑み、

「そりや、お千世さん、可いけれど、私にや手が出せなかつた。意氣地が無くつて自分ながら口惜いのよ。……惡い事をするんぢやなし、誰に遠慮が、と思つても、何だかねえ、派出過ぎたやうで差出たやうで、ぱつとして、唯恥かしくつて、何うにも驅出せなかつたの。

まあ、極りの惡い。……銀貨入を握つた手が、しつとり汗に成りました。」

と其の鹽瀬より白い指に、汗にはあらず、紅寶玉の指環。點滴る如き情の光を、

薄紫の裏に包むだ、内氣な人の可懷しさ。

七

清葉は、きれの長い清しい目で、其の銀貨入の紫を覗いて見つゝ、

「お前さんの姉なんに聞かせたら、嘸ぞ氣が利かないつてお笑ひだらう。」

「否、姉さん。」

傍目も觸らず、清葉を凝視めて聞いたお千世が、呼吸が支えたやうに恁う云つた。

「でもね、婆婆氣だの、洒落だの、見得だの、何にも那樣故とで無しに、爲やうと思つて、直ぐ那の中へ、頭からお寶を撒ける人は、まあ、澤山ほかには無い。——お孝さんばかりなんだよ。」

稻葉家の主、お千世の姉さん、暮から煩らつて引いて居る。が、錦繪のお孝とて、

人の知つた、素足を達手な婦である。
「折角お前さん、可い姉さんを持つて幸福だつたのに、」
と清葉は、もの寂しさうに、
「困るわねえ、病氣をして。」
「えゝ。」
お千世は引入れられたやうに返事して、二人の目の熟と合ふ時、自働電話に備着の番號帳がバタリと鳴る。……前に繰つて見たものが粗雜に置いたらしい、紐が摺つて落ちた音。
一寸目を遣つて見返りながら、
「そして、奈樣なの、矢張りお孝さんは相不變ず？」
「えゝ、困るのよ。二日に一度三日に一度ぐらゐ、一寸氣がつくんですけれど、直

に夢のやうに成つて了ひますわ。」
「然うだつてねえ。」
「時々、嬰兒のやうなことなんか。今しがたも、ぷつきり飴と鳥が欲いつて、然う云つて、……」
と莞爾するのが、涙ぐむより果敢く見られる。
「あら、それで飴を買ひに。」
と云ひかけて、清葉は何か思出した面色して、
「お千世さん、今の、あの、味方をして下すつた坊さんね、……」
「えゝ。」
「お前さん誰かに肖て居たとは思はなくつて、」
「肖て居て。誰に、えゝ？……姉さん。」

「一寸あの……其だと、お前さんも、お孝さんも、私も知つて居る方なんだがね。」
「然うでせう、ですから、私も屹度然うでせうと思ひましたわ。」
「まあ、矢張り、然うかねえ。氣の迷ひぢやなかつたかねえ。」
清葉は半ば獨言に云ふと、色傘を上へ取つて身繕ひをする狀して、も一度あとを見送りさうな氣構へに、さら〳〵と二返、褄を返して、火の番の羽目を出たが、入交つて、前へ通さうとするお千世と、向を變へて又立留まつた。時も過ぎたり、如何にしても、今は其の影も見えないとを心着いたらしいのである。
「では、あの、姉さんはお顏を見たことがあるんですか。」
「私は、こゝで遠いもの。顏なんて何うして？……お前さんは見たんぢやない？最も笠を被つて居なすつたけれどもさ。」
お千世は頻に瞬した。

「あら、姉さん、肖て居たつて、西川岸のお地藏樣ぢやないんですか。私は直接に見たことはありませんけれど、……でせうと思ひましたから。で、なくつて、誰に肖て居ましたの、姉さん。」
「まあ、お千世さん、肖たつてのは其の事なの。……ぢや、矢張り、氣の迷だつたんだよ。」と、うつかりしたやうに色傘を支く。
「否、氣の迷ひぢやありません。私は眞個。」
「然うね、……折があつたら、お千世さん、一所におまゐりをしやうねえ。」

手に手

八

「成程、蜜豆屋ぢや無かつたわね。」

飴屋が名代の涎掛を新しく見ながら、清葉は若い妓と一所に、お染久松が一寸戸迷ひをしたと云ふ姿で、火の番の羽目を出て、も一度仲通へ。何方の家へも歸らないで——西川岸の方へ連立つたのである。

雖然、いづれ其のうち、と云つた、地藏樣へ參詣をしたのではない。其處に、小紅屋と云ふ、苺が甘さうな水菓子屋がある。二人は並んで其の店頭。帳場に横向きに成つて、拇指の腹で、ぱら〳〵と帳面を繰つて居た、肥つた、が効性らしい、圓髻の女房が、莞爾目迎へたは馴染らしい。

「入らつしやいまし、……唯今お坊ちやんがお見えに成りましたよ。」

「おや、然うですか、小婢がついて。」

と小さな紗紗づゝみを一寸口へ、清葉は溫容なものである。

「否、乳母さんに負ぶをなすつて、林檎を兩個、兩手へ。」

と女房は正面へ居直つて、膝にちやんと手を支いて、故と目を圓くしながら、圓々ちい括顧で、頷くやうに襟を壓へて、

「懷中へ一つ、へい。」

と恍けた顏。此の大業なのが可笑いとて、店に突立つた出額の小僧は、お千世の方を向いて、くすりと遣る。

女房は念入りに尙一つ頷き、

「お土產の先廻り。……莞爾々々お歸りでございました。ですから最う今日は、お持ちに成るに及びません。眞個にお坊ちやんは、水菓子がお好きで入らつしやいます事！

お宅樣の直き御近所に、立派な店がございますのに、難有い事に手前どもが御贔負で。……小いお娘樣も其の御緣で、學校のお歸りなんぞに、（小母さんお水を一

杯。)なんて、お寄りなすつて下さいますし、土地第一の貴女方に御心安く願ひますので、房州出のこんな田舍ものも、實にねえ、町内で幅が利きますんでございます。よ。はい。」

「飛でもない、女房さん、何ですか、小娘までが、そんなお心安だてを申しますか、御迷惑でございますこと。」

「勿體ない、お蔭さまで人氣が立つて大景氣でございますよ。」

「お世辭が可いのねえ、お千世さん。」

「はあ、眞個に評判よ。」

「否、滅相な、お世辭ではございませんが、貴女方に譽められます處を、亡くなつた亭主に聞かして遣りたうございます。然ういたしましたら、生きてるうち邪慳にしましたのを嘸ぞ後悔することでございませう。しかし又未練が出て、化けてゃも

出ると大變でございますね。」

お千世が襦袢の袖口で口を壓へて、一昨年の冬なく成つた其の亭主の、聊か訛のある假聲を使ふ。

「松藏どんやあ。」

「わい。」

と叫んで、飛上ると、味柑の空箱を見事に一個、ぐわた、ぐわたんと引轉覆して松小僧は帳場口へどんと退つて、

「女房さん！」

「あゝ、驚いた。何だい。」

不意打に吃驚して、女房もぬッと立つて、

「何だねえ、お前、大袈裟な。」と立身に頭から叱られて、山姥に逢つたやうに、く

しや〳〵と窘んで、松小僧は土間へ蹲む。

「見たか、弱蟲。」

お千世は白い肱をちらりと見せ、細い二の腕を輕く叩いて、

「可い氣味さ。」

「何だね、お前さん。」と、餘所の抱妓でも、其處は姐さん、他人に氣象で、たしなめる。

「だつて、いつも人魂の土藏の處ぢや、暗がりで私を威すんですもの。」

九

「まあ、貴女方、何うぞ、まあ。」

女房は立つた序に、小僧にも吩咐けないで、自分で蒲團を持出して店端の緣臺に

——夏は氷を賣る早手廻しの緋毛氈——餘り新しくは無いのであるが、向ふ側が三間ばかり、忍返しの着いた黑板塀なのと、菓物の艶を被せたので、埃も見えず綺麗である。

「否、すぐにお暇を。——お千世さん、何が可からうねえ。」

「濟みません。姉さん。」

とお千世は瞬きで禮を言ふ。

——清葉は乃し方、火の番小屋から、直ぐに分れて歸らうとして、其の銀貨入を、其れごとお千世の帶の間へ挾みつゝ云ふのに——

「あの、極りが惡いんですがね、お前さんのために使はうと思たのを、使はないで濟んだんです。お金子だと思はないで、お千世さん。」

「まあ、何故？」

「小兒に苛められたお見舞に。」
お千世は、生際の濃い上へ、俳優があひゞきを掛けたやうに、其の紫の裏を頂いたが、手へ返して清葉の其の手に、縋るが如く顔を仰いで、
「姉さん、此のお寶で、私をお座敷へ呼んで下さいな。……些とも私、此の節かゝつて來ないんですもの。」
土地の故參で年上でも、花菖蒲、燕子花、同じ流れの色である。……生意氣盛りが、我慢も意地も無いまでに、身を投げ掛けたは、よくせき、と清葉はしみ〴〵可哀に思つた。
「菊家へ行かうよ、私がお客で。大したお大盡だわね、お小遣を持扱つて。」
と故と銀貨入を帶に納めて、
「途中で我まゝな馴染に逢つて無理に連れられたと然うお云ひな。目と鼻の前だつ

て、一旦家へ歸つてからだと、川岸の鮨は立食しても、座敷にはきちやうめんな、極りの堅いお孝さん。お化粧だの、着換だので、つひ其のまゝではお出しであるまい。……私も五時からお約束が一つある。早いが可いわね。一寸此の自働電話で、内へ電話をお掛けなさい。一所に行つて御飯を食べやう。」
「姉さん。」
と、いそ〳〵爲ながら、果敢さうに、
「最うね、内に電話は無いんですよ。」
清葉は思ひがけず疑ひの目を睜つて、
「何うして、ねえ。」
「お孝姉さんは如彼でしやう。私は滅多に御座敷はありませんし、あの……」
とお千世は言淀んだが、

「鑑札のお代だつて餘計なものだのに、電話なんか無駄だからつて、それで、讓つて了つたんでせう。一昨日から、内にはボン〳〵時計も無いんでせう、ですから、チンリンと云ふ音もしないで、寂莫ぼかんとして居るんですわ。

方々、お茶屋さんだの、待合さんへ、然う云つておいでつて云ふんでしやう。

――私がづゝと廻りましたの。

姉さん。――はじめてお弘めに連れられました時よりか、私極りが悪かつたんです。……だつて、唯、(あゝ然うですか御苦勞樣。)つてお言ひなさる許は可んですけれども、中にはねえ、(何うして。)つて。……否、冷評すんぢやありません、深切で聞いて下さるお家では、(私が些とも出ませんから。)

然う言はなけりや成りませんもの。爲う事なしに、笑つて云ひにや云ひましたが死ぬほど辛うございましたわ。」

と指を環にしつ、引靡けつ。

＋

寐起の顏にも、鬢の亂れは人に見せない身躾。他人の縺れ毛も氣に成るか、一つ座敷の年下など、小蔭で撫着けて遣る外には、客は固より、身體に手なんぞ、觸つたことの無い清葉が、此の時は、確乎頸筋でも抱きたさうに、お千世の肩に手を掛けた。

「まあ、お孝さんが廻れと云つて？」

「否。」

と驚いたやうに頭を振つて、

「私の姉さんが、そんな事！……病氣から以來、内の世話をして居る叔母さんのい

ひつけなんですよ。」

稲葉家のお孝が、然うした容體に成つてから、叔母とは云ふが血筋ではない。父親は臺灣とやら所在分らず、一人有つたが、それも亡くなつた叔父の女房で、蒟蒻島で油揚の手曳をして居た。餘り評判のよくない阿婆が、臺所から跨込んで、帳面を控て切盛する。其奴の間夫だか、田樂だか、顧髯の凄まじい赤ら顔の五十男が、時々長火鉢の前に大胡坐で、右の叔母さんと對向に成ると、茶棚傍の柱の下に、櫛卷の姉さんが、棒縞のおさすり着もの、黒繻子の腹合せで、襟へ突込んだ懐手、嫋娜に悄乎と坐つて居るのが毎度と聞く。可哀さうに、お千世は御飯炊から拭掃除、阿婆が寢酒の酌までして、ちびり〳〵と苛められる上、收入と云つては自分一人の足りない勝で、すぐにお孝の病氣の手當に差響くのに氣を揉んで、言ひ憎からう。我が口から、

「若干金でも。」と待合の女中に囁く。

不思議な事は、禍だか、幸だか、お孝の妹分と聞いたゞけで、其の向きの客人は、一目を置き、三舍を避けて、白でも稲葉家では後日が、と敬遠すること、死せる孔明活ける仲達を走らす如し。從つて些とも出ない。その爲に、阿婆の寢酒は尚ほあくどい。あはれがつて、最惜がつて、住替を勸めても、

「私が出ますと姉さんが。」

とお孝を案じて辛抱する。其の可愛さも知れてゐる。其だのに、お千世に口の掛からない時は、宵から、これは何だ、と阿婆が茶の鑵の鍼力を、指で彈いて見せると云ふまで、清葉は聞傳へて居るのであつた。

電話さへ無い始末、内證も偲ばれる……あの酒のみが、打切飴。それも欲い時は火のつくばかり小兒に成つて强請るのに、買つて歸れば既う忘れて、袋を見やうと

もしないとか。病氣が病氣の事であるから、誰の顏の見さかへも有るまいが、それにしても大分の不沙汰をした……お千世のためには、内の樣子も見て置きたい、と菊屋へ連れやうとした氣を替へて、清葉はお孝を見舞ひに行くのに、鮨と云ふのも狂亂の美女、附屬ものゝ笹の氣が惡い。野暮な見立ても、萎るゝ人の、美しい露にもなれかしと、こゝに水菓子を撰んだのである。

小紅屋の女房揉手をして、

「稻葉家さんへ。えゝ〳〵、直に、お後から持たせまして。」

小僧合點して、忽ち出額に蛸麟卷。

引摺るほどに其の奴が着た、半纏の印に、稻穗の圓の着いたのも、それか、有らぬか、お孝が以前の、派手を語つて果敢なく見えた。

二人は引返して、又、あの火の番の前へ出たが、約束事でゞも有る如く、揃つて

立停まらなければなら成かつたのは、一町たらず川岸寄りの向ふ側、稻葉家の其處が露地の中から、蜥蜴のやうに、のろりと出て、ぬつと怪しげな影を地に這はした、服裝はしよびたれ、薄汚れて、廣袖かと思ふ、袖口も綻びて下つたが、嚴丈づくりの、づんと背の高い、目深に頰被りした、草鞋穿で、裙を端折らぬ、風體の變な男があつて、懷手で俯向いて、此方へのさ〳〵と來掛つた、と見ると、ふと頰被りの裡の目ばかり、……其處に立留まつた清葉たちを見るや否や、ばねで彈かれたかと思ふ、くるりと背後向。方角をかへて川岸通へ、然ものそ〳〵と着流しのぐなりとした、角帶のづれた結目をしやくつて行く。

出て來た處が稻葉家の露地であるだけ、お孝に馮いたあやかしと思ふ可厭な影の、角の電信柱で、フッと消えるまで、二人は、ものをも言はず、見送つて居たのである。

十一

昔と語り出づるほどでも無い。敎された妾の怨恨で、血の流れた床下の土から青々とした竹が生へる。筍の（力に非ず。）凄さを何にたとふべき。五位鷺飛んで星移り、當時は何某の家の土藏に成つたが、切つても拂つても亡執は消失せず、金網戸からまざ〳〵と青竹が見透かさるゝ。近所で（お竹藏。）と呼んで恐をなす白壁が、町の表。小兒も憚るか樂書の痕も無く、朦朧として暗夜にも白い。

時々人魂が顯れる。不思議や鬼火は、大きさも雀の形に紫陽花の色を染めて、ほと〳〵と軒を傳ふ雨の雫の音を立てつゝ、棟瓦を傳ふと云ふので。

小紅屋の奴、平の茶目が、わッ、と威して飛出す、とお千世が云つたは其の溝端。

——稻葉家は眞向ふの細い露地。片側立四軒目で、一番の奥である。片側は角から取廻はした三階健の大構な待合の羽目で、其の切れ目の稻葉家の格子向ふに、小さな稻荷の堂がある。傍に、總井戸を埋めたと云ふ、扇の芝ほど草の生へた空地があつて、見切は隣町の奥の庭。黑板塀の忍返しで突當る。

其處に紅梅の風情は無いが、姿見に映る、江一格子の柳が一本。湯上りの横櫛は薄暗い露地を月夜にして、お孝の名は何時も御神燈に、緑點滴るばかりであつた。雖然、此處の露地口と、分けて稻葉家の其の住居とに、少なからず、もの〻陰氣な風說がある。

以前、仲之町の聲妓で、お若と云つた媚かしい中年增が、新川の酒問屋に旦那が出來たゝめ色を賣るのは酷い法度の、其の頃の廓には居られない義理に成つて場所を替へた檜物町。

里に馴れた吾妻下駄、からころ左褄を取つたのを、其のまゝぞろりと青畳に敷いて、起居に蹴出しの水色縮緬。達手巻で素足と云ふ藝者家の女房。むかし古石場の寄子ほど、藝者の數を二階に抱へて、日本橋に芽生への春。若菜家の盛を見せた。夏の素膚の不斷の紹明石、眞白に透く膚と、もに、汗もかゝない帶の間に、いつも千圓束が透いて見える、と出入りの按摩が目を剝いたのが、其の新川の帳尻に、柳の葉の散込むのが秋風の立つはじめ。金氣蕭條として忽ち至る殺風景。やけでお若は浮氣をする、紐がつく、蔦が搦む、蜘蛛の巣が軒にかゝる、旦那は暴れる、お若は遁げる。追掛廻して殺すと云ふ。

手切話しに、家を分けて、間夫をたてひく三度の勤めに、消え際が又榮えた、お なじ屋號の御神燈を掛けたのが、即ち此の露地で、稻葉家の前が其である。

お若と云ふのは、一輪の冬牡丹を風に咲かす間もなく、其の家で煩らひついて、

所謂勞症の、果はどつと寢て、枕も上らないやうに成ると、件の間夫の妹と稱する、奚ぞ知らん品川の女郎上り。女で食ふ色男を一度食はせたことのある、臺の鮨のくされ縁が、手扶けの介抱と稱へて入り込むで、簞笥の抽斗を明けたり出したり、引解いたり、鋏を入れたり。勝手に臺所を掻廻はした擧句が、やれ、剌身が無いわ、飯が食はれぬ、醬油が切れたわ、味噌が無いわで、皿小鉢を病人へ投打ち三昧、摺鉢の當り放題。

十二

お若の身は火消壺、螢ばかりに消え殘つた、可哀に美くしく凄い瞳に、自分のを直して着せた瀧縞お召の寢々衣を着た男と、……不斷じめの未だ殘る、服紗帶を、あらう事か、占めるは未だしも、しやら解けさして、四十歳宿場の遊女どの、紅入

友染の長襦袢。矢張り、勝手に拜借ものを、垂々と見せた立膝で、長火鉢の前にさしむかひに成つた形を、世に有るものとも思はなかつた、地獄の繪かと視めながら涙の暗闇のみだれ髪、はら〳〵とかゝる白い手の、掴んだ拳に俯伏せに、魂は枕を離れたのである。

が、姿は雨に、月の朧に、水髪の横櫛、頸白く、水色の蹴出し、蓮葉に捌く裙に搖れて、蒼白く燃える中に、何時も素足の吾妻下駄。うしろ向に成つて露地口を、カラ〳〵と踏んで、五つばかり聞こえてフッと消える。

も一度から〳〵と響くと思ふと、若菜家の格子のカタンと開く音。

極つて、同じ姿が、うしろ向きに露地口へ立つて、すいと入ると途中で消えて、あとは下駄の音ばかりして格子が鳴る。

勿論、開いたでもなければ、誰も居ない。……此を見たもの、聞いたもの。

やがて風説も遠退いて、若菜家は格子先の其の空地に生へる小草に名をのみ留めたが、二階づくりの意氣に出來て、たゞの住居には割に手廣い。……こゝで、一度待合に成つた處、開店の晩に、酔つて裏二階から庇合へ落ちて、黒塀の忍返しにぶら下つて、半死半生に大怪我をした客があつて、すぐに寂れて、間もなく行衛知れず其は引越す。

一度、勤人の堅氣が借りて、此は無事。たゞし商館通ひであつたが、旅順とやらの支店の方へ勤がへに成つて、貸家札。

時に二割方屋賃をあげた。近所では驚いた。差配の腹は大きかつた。

すぐに引越し蕎麥を大蒸籠で配つたのが、微醉のお孝であつた。……抱妓が五人と分が二人、雛妓が二人、それと臺所と婢の同勢、蜀山兀として阿房宮、富士の霞に日の出の勢。紅白粉が小溝に溢れて、羽目から友染がはみ出すばかり、芳町の前

の住居が、手狹と成つて、こゝに鏡臺の月を移して、花の島田を纏めたものが。

三年にして現時の始末。

最も中頃、火取蟲が赤いほど御神燈に羽たゝきして、頻に蛞蝓が敷居を這ふ、と云ふ頃から、傍では少なからず氣にしたものゝ、年月過ぎたことでもあり、世間一體不景氣なり、稻葉家などは揚りのいゝ方、取り立てゝ言出して、氣にさせても詮ない事と、土地で故顏のお茶屋の女中、仕上げて隱居分の箱屋なども、打出しては言はなかつた。

却つて川岸の客などに、場所も所說も能く知つて、——中には見たのが有ると云ふ——酒の座敷で威かし半分、

「歸りに摺違ふよ、露地口で。」

とまで打撒けるものは有つても、勝氣氣嵩の左褄、投遣りの酒機嫌。

「評判な人ね、あやかりたいわ。」

で、粹な音〻と聞こえた美聲。

露地の細路……駒下駄で……

と得意の一節寂莫とする。——醉へば蒼く成る雪の面に、月がさすやうに電燈の影が沈むや。

「肖然。」

と、知つた同士が囁き合つて、威した客の方が悚然とする。……

露地の細路、……駒下駄で……

「お孝、それだけは堪忍しな。」

つむじ曲りが娑婆氣な、故と好事な吾妻下駄、霜に寒月の冴ゆる夜の更けて歸る千鳥足には、殊更に音を立てゝ、カタ〳〵と板を踏む。

顔の見える時はまだしもである。

朽ちた露地板は氣前を見せて、お孝が懐中で敷直しても、飯盛さへ陣屋ぐらゐは傾けると云ふのに、藝者だものを、と口惜がつても、狹い露地は廣く成らぬ。

車は通らず、雨傘も威勢よくボンと轆轤を開いたのでは、羽目へ當つて巾つたいので、湯の歸りにも半開、春雨捌きの玉川驛。

美人の此の姿は、淺草海苔と、洗髪と、お俠と、婀娜と、(飛んだり刎ねたり。)も一寸交つて、江戸の名物の一つであるが、此の露地ばかり蛇目傘の下の柳腰は、と行逢ふものは身の毛を悚立てゝ、鶯の聲の媚めいて濡れたのさへ、晝間も時鳥の啼く音を怪む。

柳に銀の舞扇

十三

鐘さへ霞む日は闌に、眉を掠める雲は無いが、薄りとある陽炎が、ちらりと幻を淡く染めると、露地を入りかけた清葉は、風説の吾妻下駄と、擦違ふやうに悚然とした。

清葉は實際、途中でも、座敷でも、廊下でも、茶屋の二階の上り下り、箱部屋などでも、丁ど、袖袂の往通ひに、生きて居た頃の幽靈と、擦違つて知つたのであるから。——

此處まで引添つたお千世は、家の首尾を見る爲か、あるじまうけの心着けか、もの言はないで、一足前へ、袖を振つて驅出した。格子の音はカラ〳〵と高く奥から響いたけれども、幸に吾妻下駄の音では無くて、色氣も忘れて踏鳴らす臺所穿の

大な跫音。それさへ頼母しい氣がするまで、溝板を辿れば斧の柄の朽ちるばかり、漫に露地が寂しいのである。

並んで四軒、稲葉家の隣家は目下空屋で、左右あとの二軒も、珍らしく藝者家では無い。

片側の待合の其の羽目に、薄墨でぼかしたやうに、ふら〳〵と、一所に歩行いて附いて來る影法師。

清葉は例の包ましやかに、色傘を翳して居た。其の影と分れたが、フト氣に成るので、其處で窄めて、逆上るばかりの日射を除けつゝ、袖屏風する如く、怪いと見た羽目の方へ、服紗づゝみを頰にかざして、徐に通る褄はづれ、末濃に藤の咲くかと見えつゝ。

さて音信るゝ格子戸は、向ふへ間を措いて、其處へ行く手前が、下に出窓、二階

が開いて、緣が見える。

「お孝さん。」

と不遠慮に心易く、其れなり聲を掛けるのには——二人の間は疎遠でないが——いづれも名取りの橋の袂、双方對の看板主、藝者同士の禮儀があるので。

一歩とまつて、二階か、それとも出窓の内か、と熟と視めて、恁う、仰いだ清葉の目に、色絲を颯と投げたか、とはらりと映つて、稲妻の如く瞳を射つゝ沈んで輝く光があつた。

驚いた鬢のほつれに、うしろの羽目板で、ちら〳〵と一つ影が添つて、重つた蒼い影。

優しいながら、口を締めて——透つた鼻筋は氣質に似ないと人の云ふ——若衆質の細面の眉を拂つて、仰向いて見上げた二階の、天井裏へ、飄然と飛ぶのは、

一面、銀の舞扇である。

十四

晃乎と光ると、扇は沈んで影は消えた。

……が、又飜つて颯と揚羽。輝く胡蝶の翼一尺、閃く風に柳を誘つて、白い光も青澄むまで、塵を拂つた表二階。

露地も溫室のやうな春の中に、其處に一人月の如き美人や病む。

扇に描いたは、何の花か、淡い繪具も冷たさうに、床の柱に映るのが見える。

落ちると、丁と幽な音。あの力なさは足拍子で無い。……疊に辷つた要の響。日ざしの白い靜かさは、深山櫻が散るやうである。

障子を左右に開け放して、見透かされたる其の座敷に、櫺子隱れの肩も見えず、

欄干にこぼるゝ裳も見えぬ。

お孝はまさしく寢て居るのである。

寢ながら、舞扇のお手玉して、千鳥に投げて遊ぶのであつた。

「あゝ、多日逢はない……」

清葉は、又可懷しさが身に染みた。……軒の柳の翠も淺い、霞のやうな簾一枚、ちき其處に、と思ふのが、氣の狂つた美人である。……寢ながら扇を……

又飛ぶ扇、閃めく影。影に重る塀の影。

何故か渾名の（錦繪。）に魂の通ふ不思議な友に、夢現に相見る氣がして、清葉は輕く胸が轟く。

扨て恁う云ふも咄嗟の事。

直ぐに格子を音づれかけたが、歩みも運ばないで、立淀むだ。

清葉は途端に、内で、がみ〳〵と喚く聲を聞いたから。

「遲いぢやないかね。」

と云ふ、暖がれた中に痰の交じつた、冷飯に砂利を嚙む、心持の惡い聲で、のつけに先づ一つくらはせた。

續いて、

「眞晝間、……お尻を振廻はして歩行いたつて、誰も買手は有りはしないや。……鳶、鳶。」

と茶色な齒、尖つた口も見えると思ふと、

「鳶につゝかれるくらゐが落なんだよ。何處、何、お茶、お茶、何處へお茶を買つて來、」

と一寸途絶える。

お千世は飴を買つたのに。

「何だ、飴だえ。私は又お前さんの身のものは、賣買ともにお茶だと思つた。……然う飴を、お茶うけに、へゝむ、」

と笑ひ上げたは、煙草を吹いたぞ。

「矢張りお茶に緣が有らあね、……世間ぢやお天道樣と米の飯は附いて廻ると云ふけれど、お前さんにや、貰水とお茶がついて廻るんだ。お茶の水は本郷の名所だつけ。日本橋にや要らないもんだ。

えゝ、姉さんのだ、嘘をお吐き。……否、姉さんが又吩咐けたつて、口ばかりさ、直ぐに忘れて、きよとんとして居る事は知つてるぢやないか。そして、食べさしちや惡いんだ。狂女に食ものッてね、むしや〳〵食散らかされて堪るものかな。

食べると水膨んだよ。……あの上水膨れちや御當人より傍のものが助からないよ

人が乾殺しでもするやうに、蔭へ廻つちや出過ぎたがる。姉さんも又人聞きの惡いほど、何だ彼だつて食べたがる。精々何にも當飼はないで、咽喉腹が乾しとかないと此の上また何かの始末でもさせられるやうぢや何うすると思ふんだ。」

清葉は睫毛に露を押へて、二階の陽炎の光るのを見た。——扇は澄まして舞ふのである。

十五

清葉は格子へ音訪れ兼ねた。

自分と露地口まで連立つて、一息前へ驅戻つたお千世を捉へて、面前喚くのは、風説に聞いたと違ひない、茶の鑵を敲く叔母であらう。

惡戯兒の惡關係から、火の番の立話、小紅屋へ寄つたまで、一寸時間が取れて居

る。晝間近所へ振賣だ、と云ふ。そんなお尻は鳶の突くが落だ、と云ふ。お茶と水とは附いて廻る、駿河臺に水車が架つたか、と云ふ。

お千世さんは私が一所に此處へ來たことを云つたのだらうか。……言つて、そして聞えよがしに、惡體を吐くとすると、私に喧嘩を賣るのか知ら。何の怨みも無いものが、煩らふ人の見舞に來たのに、如何に分らずやの叔母だと云つて、まさか然うした事ではあるまい。露地から急いで、……あのお千世さんが心づかひ、臺所から長火鉢、二階を跨に掛けて、眼張つて居る、ものがもの。……姉さんは姉さんゆゑ、客に麁末の無いやうに、と先觸れに驅込むだ處を、頭から喚き立てゝ、あの妓が呼吸を吐いて、口を利く間も措かず、立續けて饒舌るらしい。

其れにしても、汚い口から出過ぎた惡體。お千世も同じ、藝者はお互ひ。筆がしらでも中軸でも一味についた連名の、晝鳶がお尻を突く、駿河臺の水車、水からく

りの姉さんが、こゝにも一人と、飛込まうか。

それには用意がなければならず、覺悟もしないぢや出來まいが、自分へ面當なら破れかぶれ。お千世へだけの事だつたら、蔭で綻を縫ふまで、と内氣な女が思直す。……

また其の時、異う惡默りに默つて了つて、ふと手の着けられぬまで、格子の中が寂莫して、薄氣味の惡いほど靜まつた。

此ぞ、お千世の客が來て、門に近いのを、漸と囁き得た事を頷かせる。

「えゝ。」

咳を優しくして、清葉が出窓際の柳の葉の下を、格子へ拔けやうとする、と恰も其の時。

はらりと音して、寢ながら投げた扇が逸れたか、欄干を颯と掠めて、蒔繪の波が

しら立つ如く、淺翠の葉に掛つて、月かと思ふ影が搖ぐと、清葉の雪のやうな頰を照らす。……と思はず、受けたは服紗の手。我知らず色傘を地に落して、其の袖をはつと掛けて、斜めに丁と胸に當てた。

清葉は前刻から見詰めた扇子で、お孝の魂が二階から拔けて落ちたやうに、氣を取られて、驚いて抱取る思ひが爲たのである。

潛つて流れた扇子の餘波か、風も無いのにさら〳〵と靡く、青柳の糸の縺れに誘はれた風情して、二階にすらりと女の姿。

お孝は寢床を出た扱帶。寛い衣紋を辷るやう、一枚小袖の黑繻子の、黑いに目立つ襟白粉、薄いが顔にも化粧した……何の心ゆかしやら——よう似合ふのに、朋輩が見たくても、松の内で無いと見られなかつた——潰島田の艶は失せぬが、鬢のほつれは是非も無い。

生際曇る、柳の葉越、色は抜けるほど白いのが、淺黄に銀の刺繍で此が達手の、渦卷と見せた白い蛇の半襟で、幽に宿す影が蒼い。

十六

唯……思つたほどは窶れも見えぬ。

病氣の爲めに失心して、娑婆も、苦勞も忘れたか、不斷年より長けた女が、却つて實際より三つ四つも少ないくらゐ、つひに見ぬ、薄化粧で、……分けて取亂した心から、何か氣紛れに手近にあつたを着散らしたらう、……座敷で、お千世が何時着る、紅と淺黄と段染の麻の葉鹿の子の長襦袢を、寢衣の下に褄淺く、ぞろりと着たのは、――豫ねて人が風說して、氣象を較べて不思議だ、と言つた、清葉が優しい若衆立で、お孝が凛々しい娘形、――宛然の其の娘風の艶に媚かしいものであ

つた。

お孝は弛んだ達手卷の、ぞろりと投遣りの裳を曳きながら、……踊で鍛へた褄は亂れず、白脛のありとも見えぬ、蹴出捌きで、すつと來て、二階の緣の正面に立つたと思ふと、斜めに其處の柱に凭れて、雲を見るか、と廂合を恍惚と仰いだ瞳を、蜘蛛に驚いて柳に流して、葉越しに瞰下ろし、其處に舞扇を袖に受けて、見上げた清葉と面を合はせた。

「あゝ、お孝さん。」

と聲を掛ける。

上で見詰めたなり、何にも言はず、微笑むらしいお孝の唇、紅をさしたやうに美しい。

其處へ、あとも締めないで置いたと見える、開けたまゝの格子を潜つて、顏を出

したお千世は、一杯目に涙を湛へて居る。

亂れて咲いた欄干の撓な枝と、初咲のまゝ悄れむとする葉かぐれの一輪を、上下に、中の青柳は雨を含むで、霰むだ袂を扇に伏せた。——

「清葉さんは樂勤め。」と茶屋小屋で女中が云ふ。……時間過ぎの座敷などは、(お竹藏。)の棟瓦に雀が形を現はしても、此の清葉が姿を見せた驗が無い。……替りには、刻限までだと、何時に口を掛けても、本人が氣にさへ向けば、待つ間が花と云ふ内に、催促に及ばずして、金屏風の前に衣紋を露す。

但し約束は享けて居ても、參詣の歸途に眩暈がすると、其のまゝ引籠ること度々で。此の眩暈と、風邪と、も一つ、用達と云ふ斷りが出る、と箱三の札は、裏返らないでも、電話口の女中が矢續早の弓弦を切つて、斷念めて降參する。

座敷で口惜しがるもの曰く、

「旦那が來て居るのだらう。」

勿論である。

時に說を爲すものあり。

「其のくらゐなら商賣を止めれば可い。」

難じ得て妙だと思ふと、忽ち本調子の聲がして、

「藝者が好きな旦那でせうよ。」

一言簡潔にして更に妙で、座客ぐうの音も出ず愕然として此を見れば、蓋し三味線が、割前の一座を笑つたのである。

然まで我儘が通る癖に、附合が綺麗で、朋輩に深切で、內氣で、謙遜で、もの優しい。をくれた座敷は、若い妓の後背に控へて、動く處は前へ立つて目立たないやうに取り廻す、と云ふのであるから、お茶屋の藏の前に目の光る古狸から、新道の

塒を巣立ちの雛兒まで、

「あゝ、いゝ姉さん。」

とのつけに云ふ。……續いて頭を振る所科ありと知るべし。少いもの慌てまい。

其の頭を振る事たるや、今のは嘘だと云ふ打消しではない。

十七

向ふへ對手に廻はしては、三味線の長刀、扇子の小太刀、立向ふ敵手の無い、芳町育ちの、一歩を讓るまい、後を取るまい、稻葉家のお孝が、清葉ばかりを當の敵に、引くまい、退くまい、と氣を揉むで、負けじとするだけ、豫て此方が弱身なのであつた。

張も、意地も、全盛も、藝は固より敢て讓らぬ。否較べては、清葉が取立てゝ勝

身は無い。

分けて彼方は身一つで、雛妓一人抱へて居らぬ。

此方は、盛りは四天王、金札打つた獨武者、羅生門よし、土蜘珠よし、徘々、狠も以つて來なで、萌黃、緋縅、卯の花縅、小櫻を黃に近したる年增交りに、十有餘人の郎黨を、象牙の撥に從へながら、寄すれば色ある浪に碎けて、名所の松は月下に獨り、從容として名を得る口惜しさ。

弱蟲の意氣地なしが、德とやらを以て人を懷ける。雪の中を草鞋穿いて、簑着て揖讓をするなんざ、惚氣けて鍋燒を奢るより、資本のかゝらぬ演劇だもの。

「字は玄德め。」

と、所好な貸本の講談を讀みながら、梁山泊の巵三娘、お孝が清葉を罵る、と洩聞いて、

「其の氣だから、あの妓は、(そんけん)さ。」
と内證で酒落た待合の女房がある由。
却説、言ふが如く、清葉の看板は瀧の家に唯一人である。母親がある。其は以前同じ土地に聞えた老妓で、清葉は其の實、養女である。學校に通ふ娘が一人。これには表むき、おつかさん、とおほびらに自分を呼ばせて、誰に、遠慮も氣づかひも無い。
尙ほ水菓子が好きだと云ふ、三才に成る男の兒の有ることを、前の條に一寸言つたが、此は特に斷つて置く必要がある、捨兒である。夜半に我が軒に棄てられたのを、拾ひ取つて育てゝ居る。其の兒に乳母を選んで、附けて置く裕な身上。
土藏がある、土藏には、何かの舞に使つた、能の衣裳まで約まつたものである。
嘗て山から出て來た猪が、年の若さの向ふ不見、此の女に戀をして、座敷で逢へ

ぬ懷中の寂しさに、夜更けて瀧の家の前を可懷しげに通る、と其處に、鍋燒が居た。
荷の蔭で引飲けながら、フト其の見事な白壁を見て、其の藏は？
「瀧の家で。」
「たきの家？」
「へい清葉姉さんの内でげすよ。」
や、これを聞くと、雲を霞と河岸へ遁げた。然も霜冴えて星の凍てたる夜に、其の猪が下宿屋の戸棚には、襲ねる衾も無かつたのであつた。
と、何の苦勞も、屈托も無さゝうな其の清葉が、扇子とゝもに、身を震はした。
聲もうるんで、
「お千世さん、姉さんが。」
と、二階に行むで物言はぬお孝を、其の妹に敎へながら、お千世の泣顏を、とも

に誘つて、涙ぐんだ目で欄干を仰いで、

「私、……私よ、お孝さん。」

と二度目に呼んで聲を掛けるや、

「葛木さん。」

と、冴えた聲。お孝か一聲應ずるとゝもに、崩れた褄は小間を落ちた、片膝立てた段鹿の子の、淺黄、紅、露はなのは、取亂したより、蓮葉とより、藥玉の總切れ〳〵に、美しい玉の緒の縺れた可哀を白々地。萎えたやうに頬杖して、片手を白く投掛けながら、

「葛木さん。」

二度まで、同じ人の名を、此處には居ない人の名を、胸を貫いて呼んだと思ふと支えた腕が溶けるやうに、島田髷を頂せて、がつくりと落ちて欄干に突伏したが、

忽ち反り返るやうに、衝と立つや、蹌踉々々として障子に當つて、亂れた袖を雪なす肱で、緊乎と胸にしめつゝ、屹と瞰下ろす目に凄味が見えた。

「あゝ。」

「危いわ、姉さん。」

端近な低い欄干、虹が消えさうな立居の危なさ、と見ると、清葉が落した色傘を拾つて居たお千世が、小脇に取つたまゝ慌しく驅込んだは、梯子を一飛びに二階へ介添。

「何だい、盜人猫のやうに、唐突に。」

と摺違ひに毒氣を浴びせて、ぬつと門口を覗いた、遣手面の茶鑵阿婆。

「えへゝ。」と笑ふ、茶色な前歯、金の入歯と入亂れて、窪んだ頬に白粉の殘滓。

「まあ、瀧の家のお姉樣、何うぞ此方へ。……まあ、御全盛な貴女樣が、こんな怪

物屋敷見たやうな處へ、まあ、何うした風の吹廻しで。」
清葉はきり〳〵と、扇子を疊んで、持直して、
「一寸、お茶を頂きに。」

河童御殿

十八

「は〳〵あ、葛木ですかね、姓ぢやね、苗字であるですね。名は何と云はる〳〵ですか。」
「晋三です。」
上外套を着ながら尙ほ蒲柳の見える、中背の男が答へる。
三月四日の夜の事であつた。宵に小降りのした雨上り、月は潛んで朧、と云ふが

黑雲が浸んで暗い、一石橋の欄干際。
一方は口つきでも知れる、言ふまでもなく警官である。
「新は何う書くですかね、……通例新の新ですか？　或は。」
「晋と云ふ字です。」
と男は聲を低うした。こ〳〵に事故ありと聞きつけて、通行の人集りを憚つて、然り氣なく知合が立話でもする如く裝はうと爲たらしい。
然して氣遣ふ事は無い。近間に大な建築の並んだ道は、崖の下行く山道である。
峯を仰ぐものは多いけれど、谷を覗くものは澤山ない。夜は特更往來が少い。然も、其の夜は、丁ど植木店の執持藥師樣と袖を速ねた、こ〳〵の緣結びの地藏樣、實は延命地藏尊の緣日で、西川岸で見初て植木店で出來る、と云つて、宵は花簪、蝶々髷、やがて、島田、銀杏返、怪しからぬ圓髷まじり、次第に髻の出だ、襟脚の可いの

が揃つて、派手に美しく賑ふのである。それも日本橋寄から中通へ掛けた殷賑で、西川岸橋を境にして此方の川筋は、同じ廣重の名所でも、朝晴の富士と宵の雨ほど彩色が變つて寂しい。最も此一石橋の夜の御領主、名代の河童が、雨夜の影を潜めたのも、漸つと五六年以來であるから。

初夜も過ぎた屋根起に、向ふ角の火災保險の煉瓦に映る、緣結びの紅い燈は、恰も奥庭の橋に居て、御殿の長廊下を望むで、障子越の酒宴を視める光景！　島田の影法師が媚めくほど、尙ほ世に離れた趣がある。

偶にこぼれて出て來るのは、小姓梅之助に手を曳かるゝ腰元の青柳か。密と外づして醉ざましの椎茸髻。いづれも人目を忍ふ色の、惡くすると御手討もの。巡査と對向に立つたのなんぞ、誰も立停まつて開くものは無い。

夜は、間遠いので評判な、外濠電車のキリ〳〵軋んで通るのさへ、池の水に映つ

て消える長廊下の雪洞の行衞に擬ふ。

が、名を憚つた男の、低い聲に、(あゝん。)と聞えぬ振して、巡査が耳を傾けたのは、故とらしく意地惡く見えた。

「すゝむ、所謂、進歩ですかね。」

「否——高杉晋作の晋なのです。」

と向直る。

巡査の背がぐつと伸びて、じろりと行つて、

「維新創業の名士、長州第一の英傑ぢやね。あゝ、豪い名前でありますな。ふん。」

「親がつけたんです。」

と、苦笑したらしい。

「成程、大きに其處もあるですね。」

と取つても附かない氣振をしながら、
「で、晋三の藏の字は？……いや、名刺をお持ちぢやらう、と考へるですがね。」
「確か……有りました。」
爾時、角燈を發と見せると、其手で片手の手袋を取つて、目前へ、づい、と掌、
目潰もくはせる構。で、葛木といふ男は、ハッと一足さがつた。
「差上げますので？」
「何、拜見をしますので、はあ、あゝ。」

十九

巡査は、持替へた角燈に、頰骨高く半面暗く、葛木の名刺を指の股に挾んで、
「此は非常に皺に成つとる名刺ぢやねえ。」

「つひ突込んで置いたもんですから。」と袖の下に、葛木は其名刺入を持つて居る。
「あゝ、非常に大事の物と見えるですね。」
巡査は鼻の先でニヤリと薄笑。
此の意味が受取れなくつて、
「えゝ？」と云ふ。
「深く其の、嚢底に祕して置くですね。」
「何、然う云ふ次第では無いんです。いけ粗雜なんです。」
「粗略に扱ふですか。故とですかね、名刺を。」
「故と、と云ふのぢやありません。皮肉ぢやありませんか。」
「敢て然うで無いです。が、貴下の言語が前後不揃であるからぢやね。」
「何が不揃です。」と一寸忙込む。

「お默りなさい、」
と低いが唐突に一喝して、けろりと又靜に、
「反問をすることは要らんのです。……唯、質問に對して答へれば可いのです。」
ぐい、と名刺入を突込んだが、葛木は事を好まぬらしく、其のまゝ默る。
巡査はじろりと四邊を見た。
「早く願ひたいのです」
「順序があります。――一體此の名刺はですな、……更めて尋ねるですが、確に、此は貴下のですな。」
「名が書いてありませう、葛木晋三と。」
「本郷駒込が住所で。」
「相違ありません。」

「すると……皺だらけに成つた、此の一枚而已ではありますまい。他に幾枚か持合せがありませう、有る筈ぢやがね。」
「はあ。」と、浮りした返事をする。
「其をお見せに成らんけりや不可んね。」
「生憎、持合せがありません。」
「無いと云ふ法は無い。有る可きですね。」
葛木は、此さへあれば、何事もない、と自覺したのに、實際無いのを口惜しさうに、も一度名刺入を出して、中を苛立つて搖廻はしたが、
「眞個、一枚に成つて居たのです。」
「成程……非常に交際がお廣いですね。」
「否、狹いんです。」と授げたやうに言下に答へる。

「こゝに醫學士、と記てあるですな。」
巡査は魔を射る赤い光を、葛木の胸にぴたり。
其の髯の薄い顏を照らした。
「お職掌がら、特に御交際の狹いと云ふのは、……ですな。何故ですかね。」
「開業は爲て居らんのです。」
幾干か、頷いたらしかつた。と更まつた態度で、
「何處へお歸りですな。」
「學校へ。」
「何、」
「……其寄宿へ歸ります。」
「はゝあ、學士の寄宿舍が。其は唯今ありますか。」

「醫局に居ります。」
「今時分。」
「其處に寢泊りをするんです。」
「すると、此の駒込千駄木は？」
「籍が有るんです。」
「何故ですか、籍だけお置きに成るは、……ですね。」
「妹の綠着いた家なんです。」
「御令妹の、ふん。」
と一つ呼吸を入れたが、突着けた燈も引かず。
「で、唯今まで、何處においでゞ有つたのかね。」
「此の邊に、一寸飲んで居りました。」

其處へ、二人ばかり通拔けたが、誰も立停まつても見なかつた。

二十

「何屋です、何屋ですかね、」

「……其は言はなければ成らないでせうか。勿論、是非とならば申すんです。」

「いや、其は先づ。……然し御愉快でしたな。」

「何、苦痛です。」

と向を替へて、欄干に恁れて云ふ。……

「苦痛、……成程。道理で、顏色が非常に惡いな。」

忽ち亂暴な言語しながら、横ざまに其の痩せた形を照らして、

「眞蒼ぢやね、はゝゝは。」

と笑棄てたが、底に物ある、薄氣味の惡い事。

其の時聞えた。糸より細い忍音の……

——露地の細路、駒下駄で——

「あゝ……可厭な……姉さん。」

と若い女の聲がすると、かた〳〵と驅出す音。吳服橋を、やゝ離れた辻のあたり薄墨色の川岸を傳つて、雲より黑い線路に響いた。トも一人笑つた女の聲。惡巫山戲に威したらしい。跫音は續いて響く。

葛木は拷るやうに顏を撫でゝ、

「蒼青ですか。……然うですか。客が野暮だから、化物に逢つた皈途でせうよ。」

「其は、唯今の其は、苟も行政官の一員たる、卽ち本職に向つての言語であるのですね。」

「否、實は性分です。」
と焦つたさうに言ひ切つた。葛木は衝と行かうとした。表裏、反覆、兎に角ながら、對手が笑つたから、話は濟んだ、と思つたのである。
「お待ちなさい、お待ちなさい。待たんか、おい。」
「何です。」
「つかく行つちや不可んぢやないか。尋問は此からなんだ。」
「僕は帽を取るよ。更めて挨拶をします。可加減にしなくつちや困るぢやありませんか。夜分、我々が通行するのに、恁う云ふ事は間々あります。迷惑でも御職務に對して敬意を表する。其にしてもです。唯今までさへ、立入過ぎたお尋ねの被成方ですが、……單に御熱心であるからだ、と思つたんです。
此の上何を聞くんです。眞個可加減にして下さい。……用か有るなら住所へお尋

ねを願ひませうか知らん。」
「然やう、當方の都合に因つては住所へもお尋ね出來ます、又……都合によつては本署へ御同行も出來得るですでなあ。」
「えゝ。」
有繋に葛木は一驚を吃した。餘の事である。
「雖然、御答辯に依つて、其處までに立到らない事を、紳士のために、本職は欲するでしてな、はあ、あゝ。」
「早くお尋ねを願ひます。何です、兎に角、困りました。僕は不安に堪へません。」
「すると、寧ろ此處で埒を明ける事を御希望に成るのですね。」
「勿論、是が非でも連れて行かうと思へば、其が出來ない貴下ぢやないんだから。」
「然やう。然らば反抗をなさらんで、柔順にお答へをなさるが可い。」

と入交ひに成つた向を直して、巡査は半身を反るが如く、肩を聳かして衝と又角燈を突附けた。

葛木は、其の忌はしさと、癇癪にぶる〳〵する。

「貴下は太く其の顔色が悪いですね。」

「……寒いのです。」

「寒い！　化物に逢つたのが、性分に成つて、而して今は寒い。いろ〳〵に變化しますな。」

「まあ、君は、」と足蹈で橋を刻むで焦れると、

「御都合で署へ御同行を願つても可いのです、が、御答辯によつて、其れまでに立到らない事を、紳士のために希望しますでなあ。」

「……」

榮螺と蛤

二十一

「何にしろぢやね、本職の前で顔色が悪うて、震へて居らるゝのは事實ぢやね、其は併し寒いでも構はんです。

其の寒いのにぢやね……前刻から、水に臨んで、橋の上に、此處に暫時立つて居たのは、ありや何う云ふわけですか。

勝手だ、醉覺しぢやと言はるゝかも知れん。雖然ぢやね、見つて居つたぞ、どぶん！　と音のした……」

水の面は暗かつた。

「どぶん。」

ぎり〳〵と靴を寄せつゝ、

「川の中へ放棄し込んだ、……確に新聞紙に包んだ可なり重量の有るものは、あれは何ですか。」

「あゝ。」

前の世の罪でゞもある事か、と自から危ぶみ、惶れ、惑ひ、且つ怪んで居た葛木は、餘りの呆氣なさに却つて驚いたのである。

「其の事ですか。」

「先づそれを聞かんとならんですね。」

「あれは榮螺と蛤ですよ。」

此が又少なからず這個行政官を驚かした。……其の答が餘り簡單で明瞭で加に平凡であつたから。……雖然、此の場合の平凡たるや、世間の名詞は、巡査の爲には

盡く平凡であつたらう。

巡査に取つては、魚河岸の俠男が身を投げたよりは、年の少い醫學士と云ふ人間の、水に棄てたものは意外であつた。

「榮螺と蛤。」

問返す、鼻柱かけて著しく眉を潜めた、疑惑の眼は異變に光る。

「貝類の……です。」

「いや其は否、其は然しながら初めは妖怪の符牒でゞもあるかに聞いたですが、再度繰返して說明をされたで、貝類である事は分つたです。分つたですが、……貴下は妙なものを棄てましたなあ。」

「放したのです、私は。」

「成程、で其は禁厭にでも成るですかね。」

「……雛に、雛壇に備へたのを、可哀相だから放したんですよ。」
「はゝあ、或は煮、或は燒いた奴を。」と、故と空惚けた事を云ふ。
うつかり引入れられさうだつた。が、對手が巡査である事に、彼は漸く馴れたのである。
「生のまゝですとも。」
「何等の目的ですかね。」
「目的は有りません。」
「人間が、紳士が、苟くも學士の名稱御所有の貴下が、目的なしに、目的なしに事を行ふと云ふ理由はあるまいかに考へるですね。」
醫學士は思はず激した。
「根、根掘り葉掘り。」

「御都合に因ればです、本署へ御同行を願ふことも出來るです。が、紳士として、御名譽の爲にですな。」
「分つた。……分りました。が、別に目的と云つては無い。可哀相だから其でなんです。」
「……蓋し非常な悲善家でおありですな。成程、所謂、醫は仁術であるですかね。」
「私は敢て、敢て仁者とは言ひますまい。妹の、姉の。」
「あ！」と一つ握拳を口に突込むが如く言を遮る。
ト稍しどろの體で、
「姉さんの志です。」
「姉さんの志。はゝあ、君は姉のために、嬰兒を棄てたんぢやね。」
「何！」

二十二

「前刻には御令妹であつたかに、あゝ、本職は記憶するですな。」
「然うです、然うなんです。」
「何か、年上の妹かね。」
「否、姉です。」
「答が明瞭を缺いて、不可んねえ。……爲に成らんぞ、君。」
「ですから僕の妹です。」
「はゝゝ、駄目ぢやね、君、何うも變ぢやね。」
「何が變ですか。」
「都合に因つては本署へ、ですな。」

「馬鹿を仰有い！」
「けれども、紳士のために、敢てそれは望まんのですなあ。」
「實に、貴下は。」
「誰が雛を飾つたのですか。」
「其は僕だ。」と赫となる。
「おい、」
と云ふ語調が變つて、
「確乎答辯をせんと不可んねえ。君は、今しがた、……某大學ですかね、病院に寄宿をすると言つたでは無かつたか。……大學、病院の宿舍内で、雛を飾つて遊ぶのですな。榮螺、蛤を備ふるですな。」
「如何にも。」

「事實は、……本職が、貴下を疑ふよりも、寧しろ奇怪ぢや無いですか。」
「其が姉の志ですから。」
「御令妹は、」
「妹は緣着いて、千駄木に居るのです。」
「分りました。」
はじめて僅に頷きながら、
「姉と云ふのは、ですな。」
「其まで、そんなことまで凡て言はなければ成らんのですか。……詮方がない、災難と思ふ……御都合に因つては、それは何處へでもお供をする。が、打明けてお聞かせ下さい。一體、何から起つたお疑ひなんですか。」
「聞かせませう。川へお棄てに成つたものを、明かにお話しが願ひたい？……」

「其は、」
「はゝゝ、矢張り（榮螺と蛤）か、其奴は困りましたな。」
「お信じ下さらない。」
「強ひて信じたくないとは願はんのです、紳士のために。何爲、那樣なら貴下は、其の新聞包みを棄つるに際して、きよろ〳〵四邊を眴したり、胡亂々々往來をしたんぢやね。」
「そりや何です、人が怪しみはしまいかと思つたからです。」
「はゝあ、人が怪むと云ふ事を。それぢや……御承知であつたですな。」
「ものが、ものだからですから。」と大にまごつく。
「何も貝類を川に棄つるに、世間を憚る事は無いやうに思はれる……ですね。」
「ですが、……又……貴下のやうな。」

「すると、本職がです、警官が其を怪む事は御承知の上ですか。」
「僕には分らん。」
「本職はです、貴下のために御答辯の拙劣なのを惜むです。」
「……勝手にし給へ。何うしやうてんだ。」
「……紳士のために望まない事ですな。」
「煩い、勝手になさいよ。」
「爲に成らんぞ！」
「旦那。」
と暗がりに媚かしく婀娜な聲。ほんのりと一重櫻、カランと吾妻下駄を、赤電車の過ぎた線路に遠慮なく響かすと、はつと留楠木の薫して、朧を透かした霞の姿、夜目にも褄を咲せたのは、稻葉家のお孝であつた。

——一昨年の春である——

おなじく妻

二十三

「もし、一寸。」
右側の欄干際に引添つた二人の傍へ、すらりと寄つたが、お端折の褄を取りたさうに、左を投げた袖ぐるみ、手をふら〳〵と微醉で。
「旦那、其方のお檢べはまだ濟みませんか。」
と斜めに警官を見て、莞爾り笑ふ……皓齒も見えて、毛筋の通つた、潰島田は艶麗である。
警官は二つばかり、無意味に續けざまに咳した。

「お前は何かい、あゝ。」
「はあ、お次に控へて居りました、賤の女でござんすわいな。」とふら〳〵する。
分つたか、分らないか、別に心にも留らない樣子で
「何が故に、あゝ、出チ來たかい、うむ？」
「唯々、御意にござりまする。」
と妙に可愛い聲して、
「此のお方の、」
流盼に、ト心あつてか葛木を優しく見ながら、
「お檢べが濟みませんと、後が支へますのでござんすわいな。」
「何が支へる、何が。」
「だつて——あゝ焦つたい。此方は何ぢやありませんか——御姉さんの志だつて、

お雛樣に御馳走なすつた、お定りの（榮螺と蛤。）……
でもお儀式よ。それを貴下、川ン中へお放しなすつたつて、其がでしやう、怪し
いつて事なんでせう。
もし、榮螺も蛤も活きて居ますわ。中でもね……お雛樣に飾つたのは、ちら〳〵
蠟燭の煮えます時、春雨の靜かな晩は、口を利くものなんですよ。ク、ク、」
と酸漿を鳴らすが如く、
「なんて。——可哀相に、蒸したり燒いたり出來ますかつて貴下——おまけにお雛
樣んでしやう——此の方の心意氣は、よく分つてるぢやありませんか。
私だつて放しに來ました、見て下さいな。」
片手を添へて、捧げたのは、錦出の中皿の、半月形に破れたのに、小さな口紅三
つばかり、裡紫の壺二個。……其の缺皿も白魚の指に、紅猪口の如く蒼く輝く。

巡査も葛木も瞳を寄せた。

「あら、小さいんで極りの悪い事ね……お價が高いもんですから、賤の女でござんすわいな。ほゝゝほゝ。」

桃の花片其處に散る、貝に眞珠の心があつて、雛を懷ふ風情かな。

「お座敷歸に、我家の門から、奴に持たして出たんですがね。途中で威かしたもんだから、押放出して遁げたんですもの。ヒヤリとしたわよ、眞二つ。身上大痛事。此を拾ふ時の拙者が心中、心持と云ふものは、御兩所、御推量下されい。

其でも、孝の字大達引。……ねえ、そんな思ひをして迄だつて、放しに來たんぢやありませんか。ねえ、現在。」

と左右を見つゝ、金魚鉢を覗く如く、仇氣なく自分も視めて、

「お分りに成つて、旦那。……お許しを受けないと、又叱られると成りません……

最う可いでしやう、一寸、放しますよ。」

巡査の、ものも言はない先、つか〳〵と欄干越。

「一石橋に桃が流れる。どんぶりこ。」

ぱつと鳴つて、どどどんと水の音。

兩手を絶つて、肩を細く乘出しながら、

「河童や、惡戯をおしでないよ。」

向ふ岸に鷺が居て、雲はやゝ白く成つた。

「失禮しました。」

名刺を返して、

「惡しからず……お名前だけ記憶します。」

と、鉛筆で手帳へ其の名を。……振向くお孝に見向つて、

「お前の名も？……何と云ふかい。」
「おなじく妻、とかいて頂戴。」

二十四

「實に難有かつた、姉さん。」
巡査の靴音が橋の上へ留んで、背後向の其黑い影が、探偵小說の挿畫のやうに、保險會社の鐵造りの門の下に、寂しく描出されたる時、歎息と丶もに葛木は然う云つた。
「お庇さまで助つたんだよ。」
「恐入ります、御慰懃で。」
並んで彳んで見送つて居たのが、微笑んで見向いてお孝。

「でも、驚いたでしやう、貴方。」
「驚いたつて。はじめは串戲だと思つたし、半頃ぢや、故と意地惡るくするんだと思つて癪にも障りましたがね、段々眞面目なのに氣が着いたんです。確に嬰兒でも沈めたと思つたらしい。先方が職務に忠實なんだと氣が着くほど、一度は警察か、と覺悟をしてね――まあ、しかし其でも活きた證據に、同じもの丶放生會があつて僕が放生會に逢つたやうだ。で、眞個に不思議なくらゐだ。」
「私は毎年放すんですわ。」
「それにした處で、丁ど機會よく、……私は姉の引合はせか、と思ふ。」
「御馳走樣。」
と横を向いた、片頰笑みの後毛を、男に見せて、婀娜に拂ひ、
「清葉姉さんの、でしやう一寸。」

「えゝ？」
「お驕んなさいよ、葛木さん。」
「驕る。……そりや屹とお禮をするがね、何うしてお前さん、私の名を。」
「知つて居ますよ。」
吾妻下駄をからりと鳴らして、摺下る褄を上衣の下に直した氣勢。
「今お歸り？　清葉さんの葛木さん。」
彼は退いて片手を振つた。
「止してくれ、先方が迷惑をするんだから。」
「酷く、御謙遜ね。」
「否、眞個。」と、慌しく中折をぐいと被る。
お孝は覗くやうにしながら、

「それとも、此からお出掛けなさるの。……宵にして下さいよ。然うでないと、私たちが見たくつても廊下で御目に掛れない。」
「串戲を云つちや困る……此から行つて逢へるやうなら、橋の上で巡査に捉まる、そんな色消しは見せやしない。……」
なんのッて呑氣らしく云ふけれども、實際行掛けに流した方が無事だつた。雀と違つて、ものがものだし、一寸嵩は有るしするから、宵の人目を憚つたのが、蟲が知らしたのかも知れんのだね。眞個に此から歸るんだよ。」
「ぢや、矢張りお歸りがけね、お待ちなさいよ。」
と拔出て居た簪を、反らした掌で、スッと留めて、
「然うね……姉さんの御志で、お雛樣の榮螺と蛤を、一石橋から流すと云ふのに一人ぼつち。それまで檜物町に差向ひで居た藝者が、一所に着いて來ない意氣ぢや

成程出來て居ませんね。」
「勿論。」と外套の襟を立てる。
「それぢや風説の通りだよ。」
「や、專ら風説をするのかい。」
「評判さ。お前さん。」
「其は聊か情ない。」
「意意地なし……」
と袂を投げた手を襟に、眉を明るく屹と見て、
「男の癖に。」
「此は手酷い！」

二十五

「だけども、可氣味ねえ。」
「何の怨みだね。」
「可いもの好みをするからさ。」
「相濟みません。」
葛木は寂しく笑つて、
「猛烈なる事巡査以上だ。」
「處へ……私でなく、清葉さんに出て貰ひたかつたわ。」
「其の人でさへ、可いかね、都合のいゝ時で無いと、容易に顔も見せちやくれな
い……」

「澤山よ。」と一轉と背後向く。
「否、見得も外聞も無しにさ。分けて、お前さんは全盛だ。名だけは評判で聞いて居る。……此の頃に一度挨拶、と思ふけれど、呼んでも……一寸ぢや來えんのだらうな。」
「見えるも見えないも、葛木さん、御挨拶なんて要るものですか。」
「吃と然う云ふだらうと思つた。勿論、たか〳〵更めて、口で云ふ禮ぐらゐ。」
「却つて迷惑。」
「御迷惑。」と口も足も、學士は蹴躓いたやうであつた。
お孝は濟まして、
「え、、眞平。」
「それぢや時節を待つて下さい。」

學士は決然たる態度で、一寸帽を取つて、
「名は忘れませんよ、いづれ。」と二ッ三ッ塵をはじきながら、附穂なく線路を斜めに、見えない電車に追はるゝ如く。
唯顧みて、其處で、ト被直して、杖をついた處。お孝は二つばかり、カラ〳〵と吾妻下駄を踏鳴らした。
「唯別れるの。……不意氣だねえ、――――一石橋の朧夜に、」
四邊を見つゝ袖を合はせた、雲を漏れたる洗髪。
「女と二人逢ひながら、すた〳〵（かねやす。）の向ふまで、江戸を離れる男ッてのがお前さん江戸にありますか。人目に然うは見えないでも、花のやうな微醉で、こゝに一本咲いたのは、稻葉家のお孝ですよ。清葉さんとは違ひますわ。」

「違ふから、其だから、」
學士は、つか〳〵と引返して、
「尙の事、忙しくつて、逢つてはくれまいと言ふんぢやないか。」
「え〳〵然うよ、……違ひますとも。……清葉さんと違ふのはね、今時分から一人ぢや貴方を返さない事なのよ。」
「お孝さん。」
「葛木さん、もう遲いわ。……電車も無し……巡査に咎められたりなんかして、こんな時はつけが惡い、山の手の夜道だもの、無理をすると追剝が出ますよ。」
「最も、直ぐにも、挨拶も爲たいんだけれど、遲い、ね、何しろ遲いから何處と云つて……私は働が無いのでね。」
「着いてるのが私です。――箱を出たお嬢さんだわ。お座敷は何處にでも。一

寸……一所に行らつしやいな。」
と取つて引いた外套の脇を離すと、トンと突いて、ひらりと退くや、不意に蹌踉めく葛木を、すつと立つて、莞爾見て、
「其時、屹と御挨拶なさいまし。ほ〳〵〳〵。」
と花やかものである。
「姉さん。」と抱着くやうに腰にひつたり、唐突に驅寄つたは、若い妓の派手な態度――當時一本に成りたてだつた――お孝が祕藏のお千世なのである。
「まあ、千世ちやんか。……あ〳〵、吃驚するぢやないか、ねえ。」

二十六

「だつて、姉さん。」

「姉さんぢやないよ、……唐突に何だねえ、お前、今しがた川岸の角から驅出したぢやないか。」

――露地の駒下駄――は、此の婦で、怯えた聲は其の妓であつた。

「緩り歩行いても追着いて來ないから、内へ歸つたらうと思つたのに。」

「だつて、姉さんが威すんですもの。私吃驚して遁出しましたけれど、(お竹藏。)の前でしやう、一人ぢや露地へ入れませんもの、可恐くつて、私……」

「煙草屋の小母さんに見てお貰ひなら可いものを。」

「最う閉りましたの。」

と、小腰を屈めて、欄干の上で、ふつくりした鬢を庇つた透して見る手、――橋の側は……變つて居た。

「……覗いたけれども、眞暗で、最う寢たんですもの。」

「それで何かい、また出掛けて來たのかい。」

「えゝ、一人ぢや可恐いんですもの、……でも此方がまだしもですわ。」

「なんて、お前、お約束だもんだから、歸りに緣日へ廻つて、何か買はせやうと思つてさ。さあ、行かうよ……ねえ、貴方一所に――千世ちやん、御挨拶をおしでないか。」

「――失禮。……お初に、」

「お初ぢやないよ。……貴方、此の妓は御存じだわね。」

「兩三度――千世ちやんだつけ。」

「あら、濟みません、……誰方。」

と縋り寄るやうに、外套の襟を覗いて、

「まあ、清葉姉さんに闘惚れの、」

「謝まる。」
と俯向けに、中折帽ぐるみ顔を壓へて、
「何とも面目次第も無い！」
「……清葉命……と顔に書いてあるやうだわね、口惜いね、明い處でよく見て遣らうや。」
「何處へ行く氣なんです。」
「緣結びに……西川岸のお地藏樣へ。」
肩でトンと寄添ひつゝ、
「分つたでせう、貴方、此の妓には遠慮は要らない。千世ちやん、御覽、似合つたかい。」
「あら、姉さんは？」

「お孝さん。」
「（同じく妻。）だわ。……雛の節句のあくる晩、春で、朧で、御緣日、同じ榮螺と蛤を放して、巡査の帳面に、名を並べて、女房と名告つて、一所に參る西川岸の、お地藏樣が緣結び。……これで出來なきや、日本は暗夜だわ。」
肩に掛つた留南奇の袖。
お孝を掠めて腕車が一臺。
「危え。」
矢の如し。
「おや、おいでなすつたよ……」
——露地の細路、駒下駄で——
細く透つて凄い聲する。

「可厭、姉さん。」

「それ、兄さんにおつかまり。」

飛つくお千世を葛木に縋らせて、ひとり褄を擧げて、悠然と前へ立つて、

「大丈夫、然うすりや、途中で、誰かに逢つても安心でせう。」

葛木は、扱兼ねたか、故と不答。

「千世ちやん、お前寒くは無いかい。」

果せる哉、此の一行は、それから參詣を濟まして歸りがけに、あの……仲通りで、一人軒傳ひに、包まし〻く來かゝる清葉に、ゆくりなく出逢つたのである。

横槊賦詩

二十七

「今晩は……清葉姉さん。」

「清葉姉さん、今晩は。」

然うした事も、渾名を令夫人などゝ呼ばるゝ箇條であらう、柔かな毛皮の襟卷を雪の細面蔽ふまで、深々と卷いて居る。……上衣無しで、座敷着の上へ黑縮緬の紋附の羽織を着て、胸へ片袖、溫容に褄を取る、襲ねた裳しつとりと重さうに、不斷さへ、分けて今夜は、何となく、柳を杖に支かせたい、すんなりと春の夜風に送られて、向ふから來る姿。……手を曳かれたり、三人つれたり、箱屋と並んで通るのだの、薄彩色した陽炎が朧に顯はれた風情の連中が、行違つたり、出會つたり、大勢の會釋するのが、間の隔つた時分から、——西川岸の露店の裸火を、ほんのりと背後にして、軒燈明の寂靜まつた色の巷に引返す、——此の三人の目に明かに見えたのである。

「あれだ、玄德……」

見ても分る。清葉の其の土地子に對して、德と位と可懷味の有るのに對して、お孝は口の中に呟いた。

「千世ちやん、お放しでないよ、……葛木さん、横町へなんか躲しては卑怯だことよ。……」

「何が可恐くつて遁げるものかね、惡い事をした覺は無い。」

「唯、口說いて見たばかりだッてね。」

「そしてだ、美事に刎ねられたから可いぢやないか。」

「嘘ばつかり、口說けもしないんぢやありませんか。」

「それも、評判かい。」

「先ね。」

「否、破れかぶれ、何を隱さう。言出すまいとは思つたけれども、凡夫の淺間しさに、つひ、醉つた紛れに。」

「おや。」

「が、酒の勢を假りて、と云ふのが、打明けた處だらう——然も今夜——頭から恐入らされたよ。」と、もう一呼吸、帽子を深草、簑より外套は見窄らしい。

此は蓋し事實なのである。

お孝は、一足前立つた、身を開いて、鈴を張つたやうな瞳に一目、凝視めて一寸領きながら、

「隱さず、白狀をなすつたから、私がつかまつて行くのは堪忍して上げます。……打棄つた清葉さんも豪いけれども。……」

で、立直つて凛とした聲、

「拾ひ手が立派です。……威張つて居らつしやい。そんなに可恐がる事は無いわ。」
「否、恐れはせん、が、面目ないのだよ。」と窘まるばかり襟に俯向く。
齊しく俯向いて、莞爾々々と笑つてばかり、默つて、ついて歩行いたお千世が、
衣の氣勢にそれと知つて、眞先に、
「今晩は、」
「おゝ、千世ちやん。」
所謂口説いて刎ねられたと云ふ戀人に、然も同じ夜。突落された丸木橋の流に逆らつて出逢つたのである。葛木は次の瞬間を憂慮つて、靴の先から冷く成つた。
お孝が、横合から、
「御參詣ですか、清葉姉さん。」
「は……」

と、行違つて、溫容に見返りつゝ、
「姉さんて、不厭ですよ、ほゝゝ、人が惡いわ。」
と、すつと通つた。
知らぬ振か、實際それとも、面を藪ふたので認めなかつたか、心着かない樣子で通過ぎたの、トお千世が袂を曳いたのに、葛木は宙を行くやうに、うか〳〵と思はず別れた。
——お孝——
「姉さんて、可厭ですよ、ほゝゝ、人が惡いわ。」

二十八

「ちよッ、玄德め。」

と、投げたやうに、袖を拂つて、拗身に空の雁の聲。臚を仰いで、一人立停まつた孫權を見よ。英氣颯爽として寧ろ槊を横へて詩を赤壁に賦した、白面の曹操の慨がある。

前へ行く二人の影に、其の透る聲で、此方から、

「通越し。」

と浴びせたのは、稻葉家の我家へ曲る火の番の辻であつた。

すぐに、カタ〳〵と追縋つて、

「千世ちゃん、清葉さんの長襦袢を見たかい。」

「えゝ、可いわねえ。」

「色が白くて、髪が黑い處へ、細りしてるから、よく似合ふねえ。年紀よりは派手なんだけれど、娘らしく色氣が有つて、まことに可い。葛木さん、一寸、彼處へ惚

れたんぢやないこと。」

「馬鹿な。」

「でも可いでせう。」

「長襦袢なんか、……些とも知らない。」

「まあ、長襦袢を見ないで藝者を口說く。……それぢや暗夜の礫だわ。だから不可いんぢやありませんか。今度、私が着て見せたいけれど、座敷で踊るんでないと一寸着憎い。……口惜いから、此の妓に拵へて着せませうよ。」

やがてお千世が着るやうに成つたのを、後にお孝が氣が狂つてから、ふと下に着て舞扇を弄んだ、稻葉家の二階の欄干に青柳の絲と〻もに亂れた、縺る玉の緒の可哀を曳く、燃え立つ緋と、冷い淺黄と、段染の麻の葉鹿の子は、此の時見立てたのである事を、一寸此處で云つて置きたい。

序に記すべき事がある。それは、一石橋から此の火の番の辻に來る、途中で清葉に逢つた前。

縁日は最う引汐の、黒い渚は掃いたやうに靜まつた川岸の側で、さかり場からはづゝと下つて、西川岸橋の袂あたりに、其處へ　其の夜は、紅い涎掛の飴屋が出て居た。

が、其では無い。

櫻草をお職にした草花の泥鉢、春の野を一缺かいて來たらしく無雜作に荷を積んだのは歸り支度。踵を臀の片膝立。すぺりと兀げた坊主頭へ縞目の立つた手拭の向顱卷。圓顔で頰皺の深く口の大い、笑ふと顔一杯に成りさうな、半白眉の房りした爺さま一人、かんてらの裸火の上へ煙管を俯向け、灰吹から狼煙の上る、火氣に鬱して、スバ〳〵と吸つて涎掛の飴屋と何か云つて、アハ、、と罪も無げに仰向いて

笑つた、……其の顔を此方で見ると、葛木に寄縋つて、一石橋から來たお千世が、

「あゝ、お爺さんが。」と云ふと齊しく、振拂ふやうにして驅出したのであつた。

「可愛いわね。」

其を透かして、寫繪の樂屋の如き、一筋のかんてらに、顔と姿の寫るのを、故と立淀んで、お孝が視めて、

「ねえ、一寸。……生意氣盛りの、あの時分ぢや、朋輩の見得や、世間への外聞で抱主の臺所口へ、見すぼらしい親身のものゝ姿が見えると、つんと起つて、行きもしないお稽古だの、寮坊が朝湯へ行き兼ねないのに、大道唯中、(お爺さん。)——えゝ、お千世は那の人の孫なのよ——可愛ッちやないのねえ。」

二十九

「阿爺どの、阿爺どの。」

「はい、私かねえ。」

橋から橋へ、河岸の庫の片暗がりを遠慮らしく片側へ寄つて、賣殘りの草花の中に、蝶の夢には、野末の一軒家の明窓で、かんてらの火を置いた。荷は輕さうながら前屈みに、てく〳〵歸る……お千世が爺の植木屋甚平、名と顱卷は婆婆氣がある。

背後をのさ〳〵と踉けて來て、阿爺どの。——呼聲は朱鞘の大刀、黑羽二重、五分月代に似て居るが、既にのさ〳〵である程なれば、然うした凄味な仲藏では無い。

掠ずるに日本橋の上へは、困つた浪花節の大高源吾が臆面もなく顯はれるのであ

るが、未だ幸に西河岸へ定九郎の出た唄は聞かぬ。……最も此のあたり、場所は大日本座の檜舞臺であるけれども、河岸は花道では無いのであるから。

變な好みの、萠黃が〻つた、釜底形の帽子をすッぽり、耳へ被さつて眉の隱る〻まで低めづらした、背のづんとある嚴丈造。搗て〻加へて爪皮の掛つた日和下駄で、見上げるばかり大いのが、もく〳〵として肩も胸も腹もなく、づんぐり腰の下まで着込んだのは、羆の皮を剝いた、毛を其のまゝにした筒袖である。

此がもし對丈で、赤皮の靴を穿けば、樺太の海賊であるが、腰の下の見すぼらしさで、北海道の定九郎。

見よかし羆の袖を突出し、腕を頤のあたりへ上げ狀に拱いた、手首へ面を引傾げて、横睨みにじろ〳〵と人を見る癖。

「歸るのかあ。」と少し訛る。

「はい。」

むかし權三は油壺、鰊藏から出たよな男に、爺さんは、きよとんとする。

羆は件の横睨みで、

「おい、歸るのかあ。」

「家へかね。」

「うむ。」と頷く。

「歸りますよ、はい。」

「歸ると……ふん。何處か道寄りはせんのですかい。」と、惡く應柄な癖に時々變徹に丁寧なり。

「道寄りとおつしやりますと？……」

「何よ、あれだ、お前、今彼處で。」

と人指一本、毛の中へ一寸出し、

「あれよ、藝者と少い男と三人連に逢ふたでせうが。」

「はい、はい。」と大な口を開けて續けざまに頷きながら、目は却つて半ば閉ぢて、分別したは老功也。

「知つてるだらうが、姉さんはお孝と云ふのだ、少い妓はお千世よ。」

「然やうでございます、はい。」と尙ほ胡散らしく薄目で見上げる。

「お爺どのは、何うやら大分懇意らしい樣子ですな。」

「えゝ、否、些少の。何、お前さま、何か其の、私に用事で。」

「火を一つ貸してくれ。」

と云ふ、煙草より前に、藏造りの暗い方へ、背を附着け、づんぐりと小溝を跨に挾んで大きく蹲み、帽子の中から、ぎろ〳〵と四邊を見た。が、落こぼれたやうな

影もまばらで、開いて居るのは、地蔵尊の門と、隣家の煙草屋の店ぐらゐに過ぎなかつた。

爺さんは道腰に天秤を捻つて、

「さあ、お點けなさりましし、だが、お早く願ひますので、はい。」

三十

「聞くだけ聞けば用は無いだ。」

例の訛つた下卑た語調。壓は利かないが威すと、兩切の和煙草を蠟卷の口に挾んで、チウッと吸つて、

「喃、阿爺どの、お孝が今だ、お前に別れて歸り際に、(待つてるからおいで、屹とだよ。)と言ふたではないですかい。……違やせまいが、喃。」

爺さんは、面中の皺へ皺を刻んで、

「えゝ、えゝ、然やうな事もございましたよ。」

「祕さずとも可い。喃、阿爺どの。お前は何だ、内の千世の奴の親身でしやうが。孫娘に用が有つて逢ひに來たことが二三度あるです、で、俺は知つとるですわい。お前は何か、しかし俺の顏は知らんですか。」

と釜底帽、一名(のつぺらぼう。)とも云はるゝ、青べらの鍔を拐り上げて、引傾げて剝いで見せたは、酒氣も有るか、赤ら顏のづんぐりした、目の細い、しかし眉の迫つた、其の癖、小兒のやうな緊の無い口をした血氣壯の漢である。

「へい、否、お顏は存じて居りますほどでもございませんが、其の上被の召ものでございます、お見事な、」

恁う云つたのは羅の筒袖。

「稲葉家様の縁起棚の壁でございますの、縁側などに掛つて居て拜見したことがございますよ。はい、何でございますか、それでは旦那様は。」

「うむ、内のもの同然だ。」と頤を撫でる。

界隈では、且つ知つて且つ疑ふ。土地に七不思議が有れば其の第一に數へて可い一石橋の河太郎、露次の駒下駄、お竹藏などゝともに、此熊の皮が其である、濕深さうな膏ぎつたちよんぼり目を膃肭臍。毛並の色で赤熊とも人呼んで、所謂お孝の兄さんである。……本名五十嵐源吾、北海道產物商會主とある名札を持つから、成程膃肭臍も賣るのであらうが、他に何を商つて、何處に住むか、目下の處未だ定かならずである。

それ、後家の後見、和尙の姪、藝者の兄、近頃女學生のお兄様、もつと新しく女優の監督にて候ものは、いづれも瓜の蔓の茄子である。此の意味に於て、知るもの

は、お孝に於ける羆の皮を一方ならず怪ひのであつた。

赤熊は指揮する體に頤で掬つて、

「喃、阿爺どの、だから俺には何も祕すことは要らんのですわい。」

「え、え、別に祕すではございません、(これからお茶屋へ行つて一口飲むから待つてるから屹とおいで。)と、はい、其の屹とでございますが、何の、貴下様、こんな爺に御一座が出來ますもので。姉さんが唯御串戲におつしやつたのでございますよ。」

「串戲ではなかつたがい。俺はな、あの、了ひかけた見世物小屋の裏口に蹲んで聞いとつたんだ。」

赤熊の此の容體では、成程立聽をする隱れ場所に、見世物小屋を撰ばねば成らなかつたらう、と思ふほど、薄氣味の惡い、その見世物は人間の顏の尨犬であつた。

「それは、もし、萬ケ一眞個に仰有つて遣はされたに爲ました處で、私は始めから其の氣では聞きませなんだよ。」

「何うでも可い。それは構はんが、俺が聞きたいのは、お前んに後から來い、と云うて、先へ行つた其の家の名ですわい。自分の内で無い事は知れて居る。……そりや何處ですかい、阿爺どの。」

「……。」

「あゝん、阿爺い。」

「さあ、何とか云ふお茶屋であつた。」と、獨言のやうに云つて、顱卷を反らして仰向く。

三十一

赤熊は、チエと俯向けの股へ唾を吐いて、

「今時分、何處の茶屋が起きて居らうで。待合に相違ないがい、阿爺い。祕さんと云へ、阿爺い。自分が來いと云はれた先の名を忘れると云ふがあるもんですかい。惡くすると爲に成らんのですぞ。」と教員らしい口も利く。

「さあ、何か存じません、待合さんかも、其は分りませんが、てんで私の方で伺う氣はござりませなんで、頭字も覺えませぬよ。はい。」

「で、何か。」

と一寸眺めつけた、が更つて、

「あの、野郎は何かい、あれは、つひぞ見掛けぬ奴だが、阿爺は知つとるのですかい、奴をですかい。」

「えゝ、私も今までお見掛け申しはしませんので、はい、いづれお客人でござりま

せう。」

「客には違はんで、そりや違はんで。何方の客だ知つとるだらうが。」

「其は、もし、お尋ねまでもございません、孫めがお附き申して居りましたよ。で、(旦那樣、お初に。何うぞ何分。)と私御挨拶をしました處で、爺の口から旦那樣が嬉しい、飲まして遣らう、と姉さんが申されたのでございましたよ。」

跡方も無い嘘は吐けぬ。……爺さんは實に、前刻にお孝にも其の由を話したが……平時は、緣日廻りをするにもお千代が左褄を取る此の河岸あたりは憚つて居たのである。が、抱主の家へは自分の了見でも遠慮をするだけ、可愛い孫の顏は、長者星ほど霄から目先にちらつくので、同じ年齡の、同じ風俗の若い妓でも、同じ土地で見たさの餘り、ふと此の夜に限つて、西河岸の隅へ出たのであつた。

歸りがけの霞の空の、眞中を蔽ふ雲を拔けて、かんてらの前へ、飛出したお千世

の姿は、爺さんの目には、背後の藏から昨夜の雛が拔出したやうに見えて、あつと腰を拔いて、平坦と胡座を搖いて、ものを言ふより莞爾々々として居たのである。

其の間にお孝は、葛木と二人で參詣を濟まして、知らぬ振して歸るも可い、が、却つて氣まづく思はせやう。

(お爺さん虞美人草はないの、ぽつと散る。)櫻草の前へ立つた時、……お孝に挨拶をした爺さんが、(此は旦那樣。)と其の時葛木にお辭儀をしたので。

地藏樣へお參りして、緣を結んで來た矢前——旦那樣は嬉しいね——で、それから引上げる、待合の名を其處で敎へて、旦那樣に見立てゝくれた禮心に、お爺さんには今夜一晩、……私が玉をつけて可愛いお千世を抱かして上げやう。……來て一所にお寐、串戲ぢやない、屹と待つてる。……と云つた。

仔細は然うした事なのである。

赤熊が顯はれた。

此の毛むくじやらを、稲葉家の縁起棚の傍で見た事があると云ふだけ、其の血相と、意氣込みで、樣子を悟つて、爺さんは、やがて、押くり返し何と言はれても、行つた先を饒舌らなかつた事は言ふまでも無い。

「御自分、ついて行つて見なさりや可かつた。」

何か知らぬが、お千世が世話に成る稲葉家に退がぬ中の男、と思ふだけ、蟲を堪へて飽くまで下手に出た爺さんも、餘りの押問答、惡抛執さに、恁う言つて焦れたほどである。

知らぬ〳〵で、事は濟む、問はれる方が焦れたくらゐ、言數を盡すだけ、問ふ方の苛立ち加減は尋常では無い！

「此の業突張、何だとッ。」

緣日がへり

三十三

「まあ、お前さん、怪我をしやしませんか。」

植木屋の布子の肩に、手を柔に掛けた、弱腰も撓むと見える帶腰に、優しい羽織の紋の、藤の細いは清葉であつた。

「拷問して遣る。」

赫と成つた赤熊が握拳を被ると齊しく、かんてらが飛んで、眞暗に櫻草が轉げて覆ると、續いで、兩手で頰を抛へて、爺さんは横倒れ。

苦とも言はせず、踏のめす氣か足を擧げた赤熊は、四邊に人は、邪魔は、と見る目に、御堂の灯に送らるゝやうに、參詣を濟まして出た……清葉が、朧の町に、明い

ばかりの立姿。……それと見て、つか〳〵と、小刻みながら影が映す、衣の色香を一目見ると、じた〳〵と成つて胴震ひに立窘むや否や、狼狽加減も餘程な、一度驅出したのを、面喰つて逆戻りで、寄つて來る清葉の前を、眞角に切つて飛んで遁げた、赤熊の周章てた形は、見る〳〵日本橋の袂へ小さく成つて、夜中に走る馳に似て居た。

其方は見返しもしないのである。

「お年寄を、こんなこと、何て亂暴なんだらう。」

「はい〳〵。」

爺さんは居ざり起きて、自分がたしなめられた如く、畏つて、漸と口を利く。……

……

「恐入りましてござります、はい。」

「音がしましたわ、串戲ではありません。嘸お痛かつたでせうねえ。怪我をしたんぢやありませんか。」

前刻から響いて居た、鐵棒の音が、ふッと留むと、さつ〳〵と沈めた鞋の響き。……夜廻りの威勢の可いのが、肩を並べてづッと寄つた。

「何うした、」

「什うしたんだえ。——やあ、姉さん。」

「頭たち、御苦勞です。……今、其處へ驅出して行つた大な男なんだよ。」

「腥肭臍。」

「赤熊。」と二人は囁いて、一寸目配。

「姉さん、こりや何かい、お前さんお係合なんですかい。」

「否、私は唯通りかゝつたばかりなんです。でもまあ遁げてくれて可かつたけれど

抵つて來たら何うしやうかと思つたよ。……可哀想に、綺麗な植木の花が。」

清葉は櫻草の泥鉢を、一鉢起して持ちながら、

「手傳つて、そして、よく見て上げて下さいな。遲うござんすから。私は失禮ですが。」

一人は組合の看板を、しやん、と一ッ膝に控へて、

「御心配にや及びません。見て遣りますとも。」

「では、お爺さん、お大事になさいまし。お氣をつけなさいましよ。」

「はい／＼、あなた方の御志、孫も幸福。それが嬉しうございます。」

とッちて、着きも無いことを云ふのを、しんみりと聞いて、清葉は何故か、ほろりとしたが、一石橋の方へ身を開いて向返つた處で、衣紋をつくつて、一寸、手招く。

鐵棒小脇に搔込みたるが一人、心得てつか／＼と寄つた。

「えゝ……え、腕車に、成程。えゝ可うがす、可うがすとも。そりや仔細有りやしません。何、私たちに、串戲ちやありません。姉さん、串……然うですかい、濟まねえな。」

其のまゝ見送つて小戻りする。此の徒も清葉が戻路の方を違へて、なぞへに一石橋の方へ廻つたのは知らずに居たらう。

サの字千鳥

三十三

「何だか、唐突に謎見たやうな事だけれど、それが今夜の事の抑々と云ふのだから恥辱も忘れて話すんだがね……

上野から日本橋へ來る電車――確か大門行だつたと思ふ――品川行にした處で、あの往復切符、勿論乘換札ぢやないのだよ。……其の往か復か、孰方にしろ切符の表に、片假名の(サ)の字が一字、何か書いてあると思ひますか。」

葛木は卓子臺に乘せた寄鍋に着けやうとした箸を、(まだ。)とお孝に注意されて、其のまゝ控へながら話す。

お孝は時に、猪口を取つて、お千世の酌を受けたのである。

「サの字。」

「考へるに及ばないよ。そんな字は一つも無い。處が、松坂屋の前を越して、彼處は、黒門町を曲らうとする處だ。……ふつと！　心から胸へ、衣ものの襟へ突通るやうな妙な事を思つたのが、其(サ)の字、左の手に持つて居た切符を視て、其處にサの字が一字あつたら、其から行つて逢ふつもりの。」

「清葉さん。」と薄目で見越して、猪口は紅を嚙むだかと思ふ、微笑のお孝の唇。

「……止さう、そんな事を云ふんなら。」と葛木は苦笑して、棒縞お召の寮寮衣を羽織つた、胡座ながら、兩手を兩方へ端然と置く。

潰島田を正的に見せて、卓子臺の端にぴたりと俯向き、

「謝罪つた、謝罪つた。斷つて手前の方から願ひましたものを。千世ちやん、御免なさい、と云つて、お前さんもおやゝまり。」と言憎いから先繰りに訛つて置く。

「あら、姉さん、私は何にも。」とお千世は熱かつた銚子を持添へた、はつと薫る半帕を、其のまゝ銚子を撫でゝ云ふ。

「だつて、今、(行つて逢ふつもり。)と此方がお言ひなすつた時は、直ぐに清葉さんとお思ひだらう。」

「えゝ、そりや思つてよ。」

「そち御覽、思つたつて饒舌つたつて、罪は同じくらゐだよ。其に、謝罪るには、お前さんの方が役者が上だからさ、よう、一寸。」

「貴方、御免なさいまし、ほゝゝ。」

葛木は然し考へさせられた樣子が見えて、

「成程、思つたつて饒舌つたつて、違ひは無いか。いや、然うまでは、なか〳〵悟れない。……と云ふのは矢張り色氣なんです。……極りは惡いがね。

其のサの字なんだ。切符の表に、有るべき理由の無い一字が、もし有つたら、何時も控へ〳〵斷念めて引退る、其の心が屹と屆くぞ！……想が叶ふ。打明けで言へば淸葉が言ふ事を肯いてくれる。思切つて打着からう。サの字が無ければ、今夜も優柔しく、と言へば體裁が可い、指を啣へて引込まうと、屹と思つて熟と視ると、波打つ胸の切符に寄せる、夕日に赤い渚を切つて、千鳥が飛ぶやうに、サの字が見

えた。」

「あゝ。」と其の千鳥を見るやうに、引入れられて、屏風はづれに前髪を上げた、瞼の色、お孝の瞳は恍惚と、湯氣の朧に美しい。

葛木も連れられて、夢を見るやうに面を合はせて、

「明いね、こゝの電燈は何燭だらう。」

「五燭よ、ほゝほゝ。」とお千世が花やかな笑聲。鍋は暖く霞むだのである。

三十四

「あれ……此の妓が笑ふ。」

と葛木も笑ひながら、

「客が此だから其の筈の事だけれども、私の行く家が、元來甚だ立派で無いのだ。

ね、座敷の電燈が五燭なんだよ。……

平時は、そんなでも無かつたが、過般中、連があつて、二人で出掛けた、爾時、其の千世ちやんが來たんだね。確か……」

お千世が頷く。

「覺えて居る、それを知つて。笑ふんだ。私のやうな、向ふ見ずに女に目の眩んだものに取つては、電燈の暗いのなんぞ些とも氣には成らないがね、同伴の男は驚きましたせ。何しろ火鉢に掴まつて、暫時氣を靜めて居ると、襖や障子が朦朧と顯はれるけれども、坐つた當座は、人顏も見えないと云ふ始末だからね、餘り力を入れて物を見るので、頭が痛いと云ふんだよ、其の妓も知つてるけれども、同伴の男が。客の無い閑な家だし、不景氣だし、いづれ經濟上の都合だらうから、餘分な御祝儀の出ない客が、(明を直せ。)も殿樣じみるから、同じメートルで光は三倍强と云ふ重

寶な電球ね、あいつを寄附しやうと成つて、……來て居た清葉が、」

「東西、默つて。」

と笑顏をお千世に向けて、ト故と睨んで見せる。

「私、何にも言やしませんわ。」

「いや、何とでもお言ひ、恁う成れば意地で饒舌る。」と呻と煽る。

「お酌。」

と自分でお孝が、ッ、と銚子を向けて、

「其に限るの。貴郎は氣が弱いから可厭さ。」

「處で、……清葉が下階へ下りて、……近所だからね、自分の內へ電話を掛けて、婢にいひつけて、通りへ買ひに遣つた、タングスタンが、やがて紙包みに成つて顯はれて、芝居の月の書割のやうに明るく成つた。

其處が、お鹿（待合の名。）の上段の間さ。」

「あら、串戯の間、可いわねえ。」

「いや、其の串戯ぢやない、御本陣式、最上等の座敷の意味だ。人の好い、氣の好い、（お鹿。）の女房が喜んで、貴方の座敷だ――――貴方の座敷だと云つて通す。まるで新座敷一ッ建増した勢だ。素ばらしいもんだね、恁う見えても。」

「有繋わね。」

「串戯ぢや無い、……いや、其の串戯では無い座敷の上段へ、今夜も通された――サの字の謎から、づゝと電車で此地へ來てだよ。……

平時と違つて、妙に胸がどきつくのさ。頭の頂上へ圓髷をちよんと乘せた罪の無いお鹿の女房が、寂莫した中へお客だから、喜んで莞爾々々するのさへ、何うやら

意見でも爲さうで成らない。

飯は濟んだ、と云ふのは、上野から電車で此地へ來る前に、朋達三人であの邊の西洋料理で夕飯を食べた。其處で飲んでね、最う大分醉つて居たんです。可訝くふら〳〵するくらゐ。其の勢で、くわッと成る目の颯と赤い中へ、稻妻と見たサの字なんだ。

考へれば、千鳥の知らせでも無く、戀の神のおつげでも無い。酒のサの字だつたかも知れないものを。……其の酒さへ、弱身のある人が來て對向ひに成ると、臆面の無いほてッた顏を、一皮剝かれるやうに醒めるんだからの。お察しものです。」

カチリと力無く猪口を置く。

梅ケ枝の手水鉢

三十五

「座敷へ入ると間も無くさ、びり〳〵硝子戸なんざ敲破りさうな勢、がらん どん、どた〳〵と豪い騒ぎで、藝者交りに四五人の同勢が、鼻唄やら、高笑。喚くのが混多に成つてね。上り込むと、此が狭い廊下を一つ置いた隣座敷へ陣取つて、危いわと女の聲。どたんと襖に打つかる音。どしん、と寢轉ぶ音。――楠の正成が一と梅ケ枝の手水鉢で唄出す。

座敷を取替へて上げやう、此方は一人だから。……第一寄進に着いた電球に對してもお鹿の女房が辭退するのを、遠慮は要らない、で直ぐに、あの、前刻のあれ、雛の榮螺と蛤の新聞包みを振下げて出た。が、入交るのに、隣の客と顔が合ふから

私は裏階子を下りて、鉢前へ一寸立つた。……

此處に、朝顔形の瀬戸の手水鉢が有るんです。此が又清葉が寄進に附いたのさ。お鹿の内には、まだ開業當時と云ふので手水鉢も干杓も無かつた。湯殿の留桶に水を汲んで、簀の子の上に出してある。恐らく待合の手水鉢に干杓の無いのは、厠に戸の無いより始末が惡い。右は早速調達に及んだけれど、桶は其のまゝに成つて居たのを、清葉が心着いて、何時か、女房が勘定を屆けか何か、瀧の家へ出向いた時火事見舞に貰つたのが、まだ使はないで新しい、お役に立てば、と持たして返した……

知つての通り、清葉の家は、去年の火事に燒けたんだね。

何ですよ、奥庭に有つた手水鉢を見ましたがね、青銅のこんな形、とお鹿の女房は仕方をして、そして龍の口を捻ると、ザアです。燒けてもびくともなさらない。

すつかり青苔を帯びた所が好いなんのッて私に話した。
惚れた藝者の工面の可いのは、客たるもの、無心を言はれるより尙ほ怯む、……
此處で又怯まされた。
清葉の手水鉢、で聊か醉覺の氣味。二階は梅ヶ枝の手水鉢。いや、楠の正成だ。
……大將も惜い事に、懷中都合は惡かつたね。
二階へ返つて、小座敷へ坐直る、と下階で電話を掛けます。又冷評すだらうが、
待人の名が聞える。」
二人は默つて微笑むのみ。
「ねえ、然うした電話が筒抜けに耳へ響くのは、事は違ふが、鳥屋の二階で、軍鷄の鳴聲を聞くのと肖て居る。故に君子は庖厨を遠ざく……こりや分るまいが、大盡は茶屋の構の大からむことを望むのだとね。

（誰だ、誰だ、誰を掛けてるんだ。）（何、清葉だ、清葉とは誰だ。）一座の藝者が小さな聲で、（瀧の家の姉さんよ。）（馬鹿清葉が、こんな家へ來るもんか。）
と隣座敷で憚らない高話。」
「お酌ぎ……千世ちやん、生意氣だね。お孝なら飛んで來る、と言やしないか。」
「誰も、そんな事を言ひはしませんよ。」とお千世が宥めるやうに優しく云つて內端に酌ぐ。
「口惜いねえ、……（清葉が來るもんか。）呼んで下すつた、それが私で、お孝が、こんな家へと云つて貰ひたかつた。……私は其處へ手水鉢なんぞぢやない、摺鉢と采配を兩手に持つて、肌脫ぎに成つて驅込んで驚かして遣つたものを。」
「でも、何だ、お前さんとは、今しがた逢つたばかりぢやないか。」
「ですから、今度つから、楠の正成で、梅ヶ枝をお呼びなさいよ、其の手水鉢

へ私なら三百圓入れて遣りたい、と此方でも思ふばかりだから、先方さまでも、お孝がこんな家へ來るもんか、とは言はないわね、――貴方お杯を下さいな、……チョッ口惜いねえ、清葉さんは。……」

三十六

「少々加減が惡くつて、内で寐て居た、と云つて、黑の紋着の羽織で、清葉が座敷へ。

前後七年ばかりの間、内端に打解けたやうな、そんな風采をして居たのは初めてかと思ふ。最も一寸ひく感冒と眩暈は持病で、都合に因れば假託でね――以前、私の朋達が一人、此は馴染が有つて別な或待合へ行つた頃――一寸々々誘はれて出掛けた時分には、のべつに感冒と眩暈で、いくら待つても通つて見ても、一度も逢へ

た事は無かつたんだ。最う斷念めて居た處、其の後宴會があつて、或お茶屋へ行くと、其の時、しばらく振で顏を見た。何だか、打絶えて居た親類に思掛けず出逢つたやうな可懷い氣がしたつけ。それが緣で、……時々、と云つても月に二三度、其のお茶屋で呼ぶとね、三度に二度は來てくれる。

其處の女中頭をして居たんだ、お鹿の女房と云ふのは。」

「知つて居ますわ。」

「氣心は知つたり、遠慮は無しで、其處へ行くやうに成つてから、餘り月日を置かないで、顏だけも見るのは、漸と一昨年の夏からだと思ふ。……

處で、能く、あんなで座敷が勤まるよ。……最も私なんぞは座敷の中へは入るまいが、あの人と來たら、煙草は喫ます、酒は飲ます。」

「唯、貯るばかり。」

「まあ、堪忍し給へ。猪口は唇へ點けるくらゐに過ぎますまい、朝顔の花を嚙むやうに、」

「敗軍の鬱憤ばらしに、其のくらゐな事は言つても可いのね。」

「堪忍し給へ。酒を飲まない藝妓ぐらゐ口説き憎いものは無い。」

「ちや、其方此方、當つて見たの。」

「否、人は何うだか私一人としてはなんだ。處で今夜だ――御飯は濟んだと云ふ、御粥を食べたんだとさ。」

「御養生でおいで遊ばすのね。……それから、」

「お鹿の女房も、暖るものが可からうと云ふんで、桶饂飩。」

「おや／＼おや。」とお孝は、がつかり、最一つうんざりしたらしい。

「……此處に八頭の旨煮と云ふのが有ります。」

と葛木は、小皿と猪口の間を、卓子臺の上で劃つて、

「一度讃めたが、以來お鹿の自慢でね、屹と通しものに乘つて出ます。……今日あたり土曜から日曜で私が來さうだと思ふ日は、煮て置くんだとお世辭を言つた。が、噫々、十ウに九ツ此も見納めに成らうも知れん、と云ふのは（サの字。）の謎の事。……一度口へ出して、ピシリと遣られる、二度とは面は向けられまい、お鹿も今夜切と思ふと何となく胸が迫つて卓子臺の上が暗かつた……」

お孝はポンと楊枝をくべた、すうッと帶を搖つて焦れつたさうに、

「一寸、まあ、待つて頂戴よ。お粥腹のお姫樣を饂飩で口説いて、八頭を見て泣いたつて、宛然お精靈樣の濡場のやうだね。能く、それでも生命があつて歸つて來たよ。確乎して下さいよ、後生だから、お前さん、私が附いてるから。」

で、するり卓子臺の緣を辷つて、葛木の膝に手を掛ける。

「あゝ、痛い。」

其のまゝ、背中をトンと凭たして、瞳を返すと、お千世を見て、

「何うした、お爺さんは遲いぢやないか。」

「あら、姉さん來るもんですか。」

「私は來るつもりで待つて居たのに――其處の襖を開けて御覽よ、居るかも知れない。」

「まあ、」と可愛く、目をぱち〳〵。

「可いから一寸御覽。」

と言ふ、香の煙に卷かれたやうに、跪いて細目に開けると、翠帳紅閨に、枕が三つ。床の柱に櫻の初花。

三十六

御維新些と前だつて、芝の大門通りの足袋屋に名代娘の美人が有つた。

其の時分、增上寺の坊さんは可恐く金を使つたさうでね、怪しからないのは居周圍の堅氣の女房で、內々圍はれて居たのさへ有ると言ふのさ。其の增上寺に、年少な美僧で道心堅固な俊才のが一人あつた。夏の晩方、表町へ買物が有つて、麻の法衣で、ごそ〳〵と通掛ると、其の足袋屋の小僧の、店前へ水を打つて居た奴、太粗雜だから、ざつと刎ねて、坊さんが穿きたての新しい白足袋を泥だらけにしたんだとね。……當時は電車で、毎日の事だが。

娘が夕化粧の結綿で驅出して、是非、と云つて腰を掛さして、其處は商賣物です

直ぐに足袋を穿替へさせると成つて、豫て大切なお山の若旦那だから、打たての水に褄を取ると、お極りの緋縮緬をちらりと挾んで、つくまつて坊さんの汚れた足袋を脱がさうとすると、紐なんです。……結んだやつが濡れたと來て、急には解けなかつた爲に口を添へた、皓齒で其の、足袋の紐に口紅の附いたのを見て、晩方の土の紺泥に、眞紅の蓮花が咲いたやうに迷出して、大墮落をしたと言ふ、いづも墮落して還俗だらうさ。

此方は悔悟して、坊主にでも成らうと云ふんだ。……いづれ精進には緣があります。自棄だから序に言ふが、……私は、はじめて逢つた時、二十三の年、……高等學校を出ると、祝だと云つて連出して、村田屋で御飯を驕つたものがある。酒は飲めず、畏つて煙草ばかり吐かして居たので、愛相に一本、一寸吸つて、歸りがけにくれたのが、」

「承知々々。」と又笑ふ。

「でね、口紅がついて居たんだ。」

「氣障だ。」とお孝は手酌である。

「坊主には緣があるつて事だよ。」

輕く清いで盃をさしながら、

「處を又還俗さしてあげるから、もとッこだわね。可哀相に……其のかはり小鰭の鮨を賣りやしないか。」

と倦怠さうに居直つて、

「もし、其の吸口は何う遊ばしたえ？……後學の爲に承り置きたい……ものでござるな。……よ。眞個に、」

「路傍では踏つけやう、溝も氣に成る……一石橋から流したよ。」

「あゝ、祟りますねえ。そんな男を、私も因果だ。」
「恐入ります、が聞いて下さい。」
「聞いて遣はす、お酌をおし：　御免なさいよ。」と彌々醉ふ。
「然うだ――――あゝお銚子が冷めました、と恁う、清葉が、片手で持つて、褄の深い、すんなりとした膝を斜つかひに火鉢に寄せて、暖めるのに炭火に翳す、と節の長い紅寶玉を嵌めは其美しい白い手が一つ。親か、姉か、見えない空から、手だけで壓へて、毒な酒はお飲でない、と親身に言つてくれるやうに、ト其片手だけ熟と見たんだ。……」
お孝が、偶と無意識の裡に一種の暗示を與へられたやうに、掌を反らしながら片手の指を腮に隱した。其の指には、白金の小蛇の目に、小さな黒金剛を象嵌したのが、影の白魚の如く絡つて居たのである。

後で知れた、衣類の紋も、同じ白色の小蛇の卷いた渦卷であつた。
「時に、隣の間の正成も、ふと音の消えた時、違棚の上で、チャチャ、と囁くやうに啼いたものがある。聲のしたのは、蛤です。動いたと見えて、ガサ〳〵と新聞包が搖れたらうでは無いか。」

十七

（榮螺と蛤です。……）
思掛けない音に、一寸驚いた顔をした清葉は然う云つて、土産ぢや無い、汐干では時節が違う、……雛に供へたのを放生會、汐入の川へ流しに來たので、雛は姉から預かつたのを祭つて居る……先祖の位牌は、妹が一人あつて、其が齊眉く、と言つたんだね。

そして御姉妹は、と清葉が訊くから、(實は。)と出ました。……實は、それに就いて、と言つたもんです。何に就いてだか自分にも分らない。けれどもね……何に就いたつて、あし掛七年の間、唯の一度も、氣障な、可厭らしい、そんな事を言出せさうな機會と云つては一度も無かつた。

何時も、座敷の服裝で、きちんと藝者と云ふ鎧を着て居るのから見れば、羽織で櫛卷だけに、客に取つては馴れ易い。覺悟は有つたし、サの字の謎。……

實は、と目を瞑つて切掛けたが、からツきし二の太刀が續きません。酌をして下さい、と一口に飲んで又飲んだ飲んだ。もう一つ、もう一つ酌いで欲しい、又、と立續けに引掛けても、千萬無量の思が、全然、早鐘の如くに成つて、ドキ〳〵と胸へ撞上げるから、酒なざ何處へ消えるやら。

口も濡れない處か舌か乾く。……又、清葉が何にも言はずに、那樣に煽切るのも

道理だ、と斷念めたらしく見えて、默つて酌ぐんだよ。

「あゝ、醉つた。」

と袖を擦並べたお孝の肩に、頭を支たさうに頽然と成る。のをお孝が向ふへ、片手で邪慳らしく、トンと突戻した、と思ふと、其の手を直ぐに、葛木の膝へ。敷いて重ねた腕枕に、ころりと横に成つて、爪先をすつと流す、と靡いた腰へ、男の寢衣の裾を曳いて、半ばを掛けた。……

「肝心な處、……それから。」と自若として言ふ。

「弱つた……」

「私を口説く氣で、可うござんすか。眞個は、あの御守殿より、私の方が口説くには煩いんだから、其の積で、しつかりして。」

「破れかぶれは初手からだ。構ふもんか！……更つて（清葉さん）。……」

「默つて顏を見ましたかい。」

「惚れたと云ふのが不躾であるなら、可懷いんです、床いんだ、慕しいんです。……私に一人の姉がある、姉は人の妾だつた。……戀こがれた若い男が有つたのに、生命にかへて或相場師の妾に成つた……其は弟の爲だつたんです。

私の父親は醫師だつたんだよ。……と云ふお醫師も、築地、本鄕、駿河臺は本場だけれども、藥研堀の朝湯に行つて、二合半引掛けてから脈を取つたんださうだから、醫師の方では場違ひだね。

廣袖を着たまゝ亡くなると、看病やつれの結び髮を解きほぐす間も無しに、母親も後を追ふ。

姉は二十、私は十三、妹は十一で、六十を越して祖母さんが、あとに殘つた……私と妹は奉公に出たんです。

姉は祖母をかゝへて、裏長屋に間借りをして、其處で、何か內職をして露命をつないで居る。

私が小僧に成つたのは、赤坂臺町の葉茶屋だつた。」

膝に島田を乘せながら葛木の色は白澄んだ。

チャラン〳〵、と河岸通、五郎兵衞町を出番の金棒。

一重櫻

三十八

「忘れもしない、づゝと以前——今夜で言へば昨夜だね——雛の節句に大雪の降つた事がある。其の日、兩國向ふの得客先へ配達する品があつて、其は一番後廻途中方々へ屆けながら箱車を曳いて、草鞋穿で、小僧で廻つた。日が暮れたんです

兩國の橋を引返した時の寒さつたら、骨まで透つて、今思出しても震へ了う。

何の事は無い、山から小僧が泣いて來たんだ。

人通りは全然無し、大川端の吹雪の中を通魔のやうに驅けて通る郵便配達が、唯た一人。……其が立停まつて、チョッ可哀相にと云つた。……聲を出して泣きながら、聲も涸れて、漸と藥研堀の裏長屋の姉の内の臺所口へ着いた、と思ふと感覺が無い、

浸々と降る雪の中に、唯ごしんと云ふ音がしたつて、姉が後で言ひ〳〵した。

處が何うです……妹は妹で、其の前夜から奉公先を病氣で下つて、内で寢て居る。

此が又悲慘でね、……聞いて見ると、猫の小間使に行つて居たんだ。主人夫婦が可恐い猫好きで、其の爲に奉公人一人給金を出して抱へるほどだから、其の手數の

掛る事と云つたら無い。お剩に御祕藏が女猫と來て、產の時などは徹夜、着つ切。生れた小猫に、すぐに又色氣が着くと、何と何うです、不潔物の始末なんざ人間なみに爲せられる。……處へ、妹が女の子の癖に、豫て猫嫌ひと來て居たんだものね死ぬほどの思ひで、辛抱はしたんだが、遣切れなく成つて煩らひついた。(少し變だ顏を洗ふのに澄まして片手で撫でる、氣を鎭めるやうに。)と云つて主人から注意があつたんだとね。

祖母は祖母で、目を煩らつて殆んど見えない。二人の孫を手探りにして赤い涙を流すんぢやないか。

私は氣が着くと、其の夜、――後で妹の話を聞いて慄然して飛んで出たが、猫行火に嚙着いて居て、豆煎を頰張つたが、餘り腹が空いて口が乾いて咽喉へ通らないから、番茶をかけて掻込むだつて。

内職の片手間に、近所の小女に、姉が坂東を少々、祖母さんが宵は待ぐらゐを教へて居たから、豆煎は到來ものです。

（白酒をおあがり、晋ちやん、私が縁起直しに鉢の木を御馳走しやう。）と、鍼落しの長火鉢の前へ、俎と庖丁を持出して、雛に飾つた榮螺と蛤をおろしたんだ。

重代の雛は、掛物より良い値がついて、疾に賣つた。有合はせたのは土彩色の一もん雛です。中にね、――潰島田に水色の手柄を掛けた――年數が經つて、簪も拔けたり、其の鬢の毛も凄いやうな、白い顔に解れたが――一重櫻の枝を持つて、袖で抱くやうにした京人形、私たち妹も、物心覺えてから、姉に肖て居る、姉さんだ〳〵と云ひ〳〵したのが、寂しく其の蜜柑箱に立つて居た。

其をね、姿見を見る形に、姉が顔を合はせると、其處へ雪明りが映して蒼く成るやうに思つたよ。姉が熟と視めて居たが、何と思つたか、榮螺と蛤を舊へ直すと、

入かはりに壇へ飾つた其の人形を取つて、俎の上へ乘せたつけ……」

「千世ちやん。」

と葛木の膝枕のまゝ、お孝が呼んだ。

「はあ。」と襖越しに返事した。お千世は、前刻其處を見せられた序に、……（眠からう先へお寢な。）と言はれたのである。そして寂寞して今しがた、ずる〳〵と帶を解いた形氣がした。

三十九

「寒く成つた、掻卷をおくれ。」

とお孝は曲げた腕を柔く疊に落して、手をかへた小袖の縞を、指に掛けつゝ男の膝。

「姉さん、私、帶を解いてよ。」
「生意氣お言ひでないよ、當も無しに、可いから持つといで。」
「うまい裝をして、」
と膚の摺れる、幽かな衣の捌きが聞えて、
「御免なさいまし。」と抱いて出た搔卷の、それも緋と淺黄の派手な段鹿子であつたのを、萌黄と金茶の翁格子の達手卷で、ぐいと縊つた、白い乳房を夢のやうに覗かせながら、ト跪いてお孝の胸へ。
襟脚白く、起上るやうにして、づるりと咽喉まで引掛けながら、
「貴方、同じ柄で賴母しいでせう、清葉さんの長繻袢と。」
學士は默つて額を壓へる。
「姉さん、枕よ……」

「不作法だわ、二人で居る處へ唯た一ッ。」
「知らない、姉さんは。」
「持つてお歸り。」
「はい。」
と立つて、脛をする〳〵と次の室へ、襖を閉めやうとして一寸立姿で覗く。羽二重の紅なるに、緋で渦卷を絞つたお千世の其の長繻袢の絞が濃いので、乳の下、鳩尾、窪みに陰の映すあたり、鮮紅に血汐が染むやうに見えた——俎に出庖を控へて、潰島田の人形を取つて据ゑた其話しの折の所爲であらう。
凄さも凄いが、艶である。其の緋の絞の胸に抱く蔽の白紙、小枕の濃い淺黄、隅田川のさゞ波に、櫻の花の散敷く俤。
非ず、此時、兩國の雪。

葛木は話したのである。

姉の優しい眉が凛と成つて、顔の色が蠟のやうに、人形と並んで蒼みを帶びた。

餘りの事に、氣が違つたんぢやないかと思つた。

顔の色が分つたら祖母さんは姉を外へ出さなかつたらうと思ふね。——兄弟が揃つた處、お祖母さんも、此の方がお氣に入るに違ひない、父上、母上の供養の爲に活ものだから大川へ放して來やうよ……

で、出たつ切、十二時過ぎまで歸らなかつた。

妹が涙ぐんで、(兄さん、姉さんは？　見て來て下さい。)と言ふ。私も水へ飛込み兼ねない勢で、臺所へ出やうとすると、姉は威勢よく其處へ歸つた……

白鳥を提げてね、景氣よく飲むんだつて……當人既に微醉です。お待遠樣と持込んだのが、天麩羅蕎麥に桶饂飩。

女二人が天麩羅で、祖母さんが私と饂飩なんだよ。考へて見ると、其の時分から意氣地の無い江戸兒さ。

其の晩、豫て口を利いた濱町の骨董屋の内へ驅込ひで。(あい。)と返事をしたんだつて。

淺草、花川戸の、軒に桃の咲く二階家に引越して、都鳥の鑑甲の花笄、當分は島田のまゝで、祖母さんと妹が其處へ引取られて、私は奉公を止して、中學校の寄宿舍へ入る。續いて白筋の制帽と成つて、姉の思一つなんだ。かみわざで助けられるやうに、金釦の制服と漕ぎつけた。」

伐木丁々

「……迄は、先あ可かつたんです。……處が、其の後祖母の亡くなつた時も、妹が婚禮をした時ぐらゐなもので、可懷い姉は、毎晩夢に見るばかり。……私には逢つてくれない。二階の青簾、枝折戸の朝顔、夕顔、火の見の雁がね、忍返しの雪の夜、それこそ、啼く蟲か小鳥のやうに、どれだけ今戸のあたり姉の妾宅の居周圍を、あこがれて徘徊つたらう、……人目を忍び、世間を兼ねる情婦でゞも有るやうに。——暗號で出て來る妹と手を取つて、肩を抱合つて、幾度泣いたか知れません。……姉は恥かしいから逢はぬと歎く。女の身體の、切刻まれる處が見たいか、と叱るんだね。

其の弟の身に成ると、姉は隅田川の霞の中に、花に包まれた欄干に立つこと、私を守つて居るやうでもあるし、紅蓮大紅蓮と云ふ雪の地獄に、俎に縛られて、胸に庖丁を擬てられながら、救を求めて悶えるとも見える……

死ものぐるひに勉強をしたよ。

大學へ入ると言ふ、其の祝ひだ、と云つて、私を村田屋へ連出したのは、姉の旦那だ。

其の時清葉を見ました。

心の迷ひか、濟まん事だが、背恰好、立居の容子が姉に肖然。

此の方は手形さへあれば、曲りなりにも關所が通られると思ふと、五度に一度、それさへ半年の間なんだ、……小遣を貯めるんだからね。……また藝者の身に成つて見りや、迷惑な事は夥多しい。」

お孝は默つて頭を掉つた。

「姉の方は、天か地か、まるで幽明處を隔つ、遠い昔のものがたりの中に住むか、目近に姿ばかりの錦繪を見るやうだらう。同じ、娑婆に、おなじ時刻に、同じ槍物

町の土地に、たゞ町を離れて、本郷の學校の門と、格子戸を隔てたゞけで住むで居る筈の清葉さへ、夢に見ても夢でさへ、遠出だつたり、用達しだつたり、病氣だつたりして逢へないんだものね。半年の間熟と目を塞いで居て、お茶屋の二階で目を開いて、ドキ〳〵する胸を壓へるのが其の仕誼なんだ。

一度も夢で泣いたのは……」

天井を高く仰いで云つた、學士の瞳は水の如し。

「何處か……私の寄宿舍の二階と向合ふ、同じ高さに川が一筋……川が一筋。……で、夢だらう。水は其の下を江戸川の（どん〳〵）ぐらゐな流れで通る。向ふ岸に二階がある。表だけ見えて、欄干が左右へ……眞中に榎の大樹があつて仕切る、其の二階がね、一段低く成つて流に望んで、も一つ高い座敷が裏に有りさうなんだ、夢だからね、お聞き。……いや聞いておくれ。

其の左右の欄干の、向つて右へ、嫐娜と掛つて、美しい片袖が見える。ト頬杖か何か、物思はしい風情で、熟と此方を視めるらしい、手首が雪のやうに、ちらりと見えるのに、顔は榎に隠れたんだ。榎は何處か、深山の崖か、遠い驛路の出入境に有る、繁つた大な年經る樹らしい。

其處へね、むく〳〵と動いて葉を分けて、ざわ〳〵と枝を踏んで、樵夫が出て來た。花咲爺の畫にあるやうな、あゝ、」

と横を向いて卓子臺を幽に拊つて、

「前刻、西川岸で逢つた植木屋……ね、一寸肖て居たよ。取留めは無いのだけれども。

其爺さんが、コツン〳〵と斧を入れる。が、斧の音は、あの伐木丁々として、百里も遠く幽だのに、一枝、二枝、枝は、ざわ〳〵と緑の水を浴びて落ちる。」

「三枝、五枝、裏掻いて其の繁茂が透くに連れて、段々、欄干の女の胸が出て、帶が出て、寢着姿が見えて、頬が見えて、鼻筋の通る、瞳が澄んで、眉が、はつきりと成る。縺毛がはら〳〵とかゝつて島田髷が見えた。

川の水が少し渺として、月が出たのか、日が白いのか、夜だか晝だか分らない。

……間が凡そ何のくらゐか知れないまで遠く成る、と其の一段高い女の背後に、すつくと立つた、大な影法師が出た。一段高いのに、突立つたから胸から上は隱れたが、人とも獸とも、大な熊が蔽はれかゝるやうに見えたんだがね。」

「一寸待つて！」

お孝の怯えたらしい慌しさ。が沈んで力ある聲に、學士は夢から現の世に引き戻

されて、

「えゝ、」と驚く。

「此處を抱いて居て下さい。」

其の聲は、最う靜であつた。掻卷越に、お孝は學士の手を我が胸に持添へて、

「さあ、話しておくんなさいな、――身に染みるわねえ。」

「なあいは無いんだよ。……すが〳〵しいが、心細い、可哀な、しかし可懷しい、胸を絞るやうな驛路の鐸の音が、りん〳〵と響いたので、胸がげつそりと窪んで目が覺めるとね、身體が溶けるやうな涙が出たんだ。

其の二階越の女が、何うしても姉なんだ。いや清葉だつた。然も、つひ近頃の事なんだよ。」

「……。」

「話が前後に成つたんだがね、……夢を見たのは、姉が最う行衛知れずに成つてからです。」

「行方知れず？……」と手を支く音。

「私が兎に角、今の學校を卒業すると、妹には代々の位牌を、私には其の一組の雛と、人形を紀念に殘して、觀音樣の巡禮に、身は亡きものと思つておくれ、——妹に——達者でおくらし、——私に、晋さん御機嫌よう——

妹には夫がある。

此の行衛を探すには、私が巡禮に出なければ成らないんだ。

が、それは今出來兼ねる。

雖然、夢にも快く逢へる事か、似た人にさへ思ひのまゝには口も利けない。七年越し（私は、姉が欲しい、……お前さんが欲しい、清葉さん。）と清葉に云つた。

今夜思切つて言つたんだ。

唯他人でありたく無い！　が、いま此の二人は、きやうだいに成り得る世界を持たん。夫婦に成りたい。一所に成りたい、唯他人ではありたく無い。しかし樣子を見ても大抵分る、此は肯入れてはくれないだらう、斷然斷わらるゝに違ない！

私は、お前さんから巡禮に成る、少くとも行方知れずに成る、杯をうけて下さい。」

「御守殿は何と云つて？」と言は烈しく、搔卷はすらりとして居る。

「清葉は、すつと横を向いて、襦袢の袖口をキリ〳〵と嚙んだ。」

「私は胸が迫つたよ。……、清葉が、聲を震ませて言つた。……（お察し申します。）」

「へえ。」

「（貴方の姉さんが私でしたら、貴方に何とおつしやるでしやう。貴方は姉さんに

お聞き下さいまし。私には母があります、養母です。）と俯向いたが、起直つて、（母に肯かなければ成りません。ト……また私には子があるんです。其の子の父があるんです。一人極つた人があれば、果敢ないながら藝者でも操を立てねば成りません藝者の操、貴方お笑ひなさいまし。私は泣いて、其のお別れの杯を頂きませう。）……

「あゝ、言ひさうなこつた、御守殿め、チョッ。」と膝を丁と支くと、颯と搔卷の紅裏を飜す、お孝は獅子頭を刎ねたやうに、美しく威勢よく、きちんと起きて、

「でも、有繋に土地の姉さんだねえ。」

「もし〳〵、貴女樣、もし……」

此處に葛木に物語られつゝある清葉は、町を隔て、屋根を隔てゝ、彼處に唯一人水に望むで欄干に凭れて彳む。……男の夢の流では無い、一石橋の上なのである。が、姿も水も其の夢よりは幻影である。

唯、小腰を屈めて差覗き、頭を搖つて呼掛けたのは、顱卷も尙だ除らないまゝの植木屋の甚平爺さん。

「今頃、何をしておいでなさります、お一人でこんな處に……はゝゝ、」

と底力の無い愛相笑で、

「いや、もう、人樣の事をお案じ申すと云ふ効性もございません。……お助けを被りました御禮を先へ申さねばなりませんのでございました。はい、先刻は何とも早や、お庇で助りました。頓と生命拾ひでございます。それに又、お情深い貴女樣、

種々と若衆たちまで、お優しいお心着を下さいまして、お禮の申上げやうもございません。」

「あゝ、植木屋さん。」

と云ふ……人を見た聲も樣子も、通りがゝりに、其の何となく悄れたのを見て、下に水ある橋の夜更、と爺が案じたほどのものでは無い。

「今、お歸りなんですか。」

「はい、えゝ、貴女からお心添へ、と申されて、途中で又待伏せでもされるやうな事があつては成らねえ。泊れ、世話をせう、荷なりと預つて遣らうと、恁う云うて下さいましたが、何、前後の樣子で、私、尺を取りました寸法では、一時赫として手を上げましたばかり。然して意趣遺恨の有る覺えとてもございませず、……何また、此の上に重ねて亂暴をしますやうなれば、一旦は些と遠慮がございまして故と

控へましたやうなものゝ、いざと成れば、何の貴女、唯打たれて居りますものか。向脛を搔拂つて、ぎやつと傾倒らしてくれますわ。」と影辨慶が橋の上。固より好む天秤棒、眞中取つて擔ぎし有樣、他の見る目も覺束無い。

附け景氣の廣言さへ、清葉は眞面目に憂慮ふらしく、

「でも、お年寄が、危いぢやありませんかね、喧嘩は唯當座のものですよ。一晩明かしてお歸りなさると可かつたのにねえ。」

「はい、それに實は何でございます、……大分年數も經ちました事ゆゑ、一時半時では、誰方もお心附の愛慮はございませんが、……貴女には、何をお祕し申しませう、私は其の、はい、以前は矢張り此の土地に住ひましたもので。

「まあ、」

「えゝ……伜が相場ごとに掛りまして分散、と申すほど初手から然したる身上でも